南あわじ市文化財調査報告書　第17集

南あわじ市埋蔵文化財調査年報XI

２０１４年度　埋蔵文化財調査

２０１９年　３月

兵庫県南あわじ市教育委員会

平石遺跡　10 区・28 区　全景

はじめに

兵庫県最南端の淡路島に位置する南あわじ市は、周囲を海に囲まれた自然豊かなまちです。現代にいたるまで、ここに暮らしてきた人々は、この環境や海上交通を活かして盛んに他地域の人々と様々な交流を行ってきたと思われます。平成27年4月に発見された松帆銅鐸も、このような海と深い関係を持つ人々と関連する遺物との見解も出ており、今後様々な分野で調査・研究の進展が、おおいに期待されるところであります。

さてこの度、平成26年度の埋蔵文化財調査の成果概要を『南あわじ市埋蔵文化財調査年報XI』として刊行することになりました。今回の報告は、榎列下幡多地区所在のおのころ島遺跡と湊里地区所在の平石遺跡など3地区の遺跡となっています。おのころ島遺跡は古事記などに記された日本で最初に誕生したとされる“おのごろ島伝承地”の一つであるおのころ島神社に隣接する遺跡で、古墳時代の遺物が見つかりました。また三原川河口付近に位置する平石遺跡は三原平野の中心となる集落の一つで、松帆銅鐸埋納推定地に近く、これまでの調査で同じ弥生時代の遺構・遺物も多数確認されていることから、松帆銅鐸を考える上で鍵になる遺跡と思われます。

今後しばらくは、圃場整備事業など大規模な開発事業も続くと思われますが、教育委員会としてもより一層文化財の保護・活用に努めていく所存ですので、ご支援賜りますようよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、調査及び本書を作成するにあたり、ご指導ご協力いただいた方々に対し心よりお礼申しあげます。

平成31年3月

南あわじ市教育委員会
教育長　浅井　伸行

例　言

1．本書は、兵庫県南あわじ市教育委員会が2014（平成26）年度に実施した埋蔵文化財調査の記録である。
2．調査は、南あわじ市埋蔵文化財調査事務所の山崎裕司・坂口弘貢・定松佳重・的崎薫が担当した。
3．出土遺物の整理作業は、赤井友美・宇治田力・垣脇美奈子・白川裕二・富岡美早子・豊田亜希子・濱本善美・桝本早苗・松下矩之・三宅靖子が行った。
4．本書の編集は、坂口が行った。執筆・レイアウトについては文末に記している。調査担当者については、調査一覧表に記す。
5．各遺跡の発掘調査および本書作成にあたっては、森岡秀人氏にご協力とご指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する。

目　次

巻頭写真図版

はじめに

例言

第１章　埋蔵文化財事業の動向 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第２章　埋蔵文化財調査の成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

　第１節　埋蔵文化財調査一覧表および調査位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

　第２節　主な埋蔵文化財調査の成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

　１　おのころ島遺跡（７・８次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

　２　平石遺跡（５次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

　３　嫁ヶ渕遺跡（６次調査）・木辺遺跡・長手遺跡・国衙廃寺跡（２次調査）・・・・・・・・ 23

第１章　埋蔵文化財事業の動向

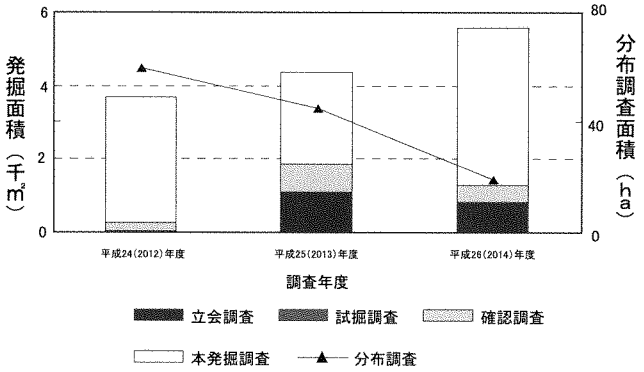
平成26年度は、分布調査２件、立会調査２件、試掘調査１件、確認調査２件、本発掘調査２件を実施した。立会・試掘・確認・本発掘調査の調査面積の合計は、5,585.7㎡となり、平成25年度の4,353.2㎡より約1,230㎡の増加となった。

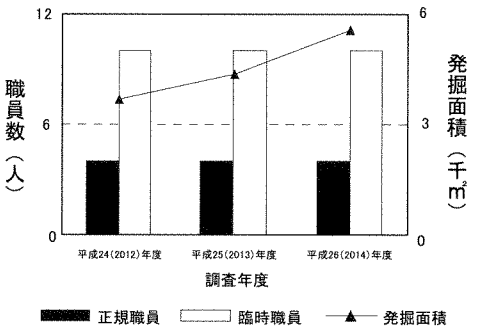
主な発掘調査は、榎列下幡多地区での民間の開発事業と湊里地区の県営圃場整備事業に伴う本発掘調査、神代国衙～賀集立川瀬地区での県営圃場整備事業に伴う確認調査、賀集八幡東地区での民間開発事業に伴う試掘調査１件、賀集八幡北地区での団体営圃場整備事業に伴う分布調査が１件で、圃場整備事業に伴う調査の割合が高いが、民間事業に伴う調査も４件行った。その内湊里地区の平石遺跡では、縄文時代前期～室町時代の遺構・遺物を確認した。特に古代・中世の遺構は建物群を形成しており、三原平野の中心的集落の一つになることがわかってきた。

年度	分布調査	立会調査	試掘調査	確認調査	本発掘調査	発掘面積	職員数	
							正規職員	臨時職員
平成24（2012）年度	60.0	0	28.0	256.0	3,406.7	3,690.7	4	10
平成25（2013）年度	45.1	1,098.6	16.0	736.0	2,502.6	4,353.2	4	10
平成26（2014）年度	19.2	806.4	16.0	464.0	4,299.3	5,585.7	4	10

＊単位：分布調査（ha）　調査面積（㎡）

調査量と職員数の推移１





調査量と職員数の推移２

啓蒙普及活動としては、『発掘調査速報展－平成25年度調査－』を平成27年１月10日～３月26日の期間に市内４ヶ所を巡回した後、４月１日以降は、新庁舎にて展示を行った。また西淡公民館でミニ展示の展示入れ替えを２回行った。刊行物としては上記速報展のパンフレットと『木戸原遺跡Ⅰ』をそれぞれ発行した。トライやるウィークでは、三原・広田中学からそれぞれ３名の生徒の受け入れをし、神代・松帆小学校、吉備国際大学への出張授業などを行った。また夏休み期間中に市内４ヶ所の施設で合計198人の児童が勾玉作りを体験した。

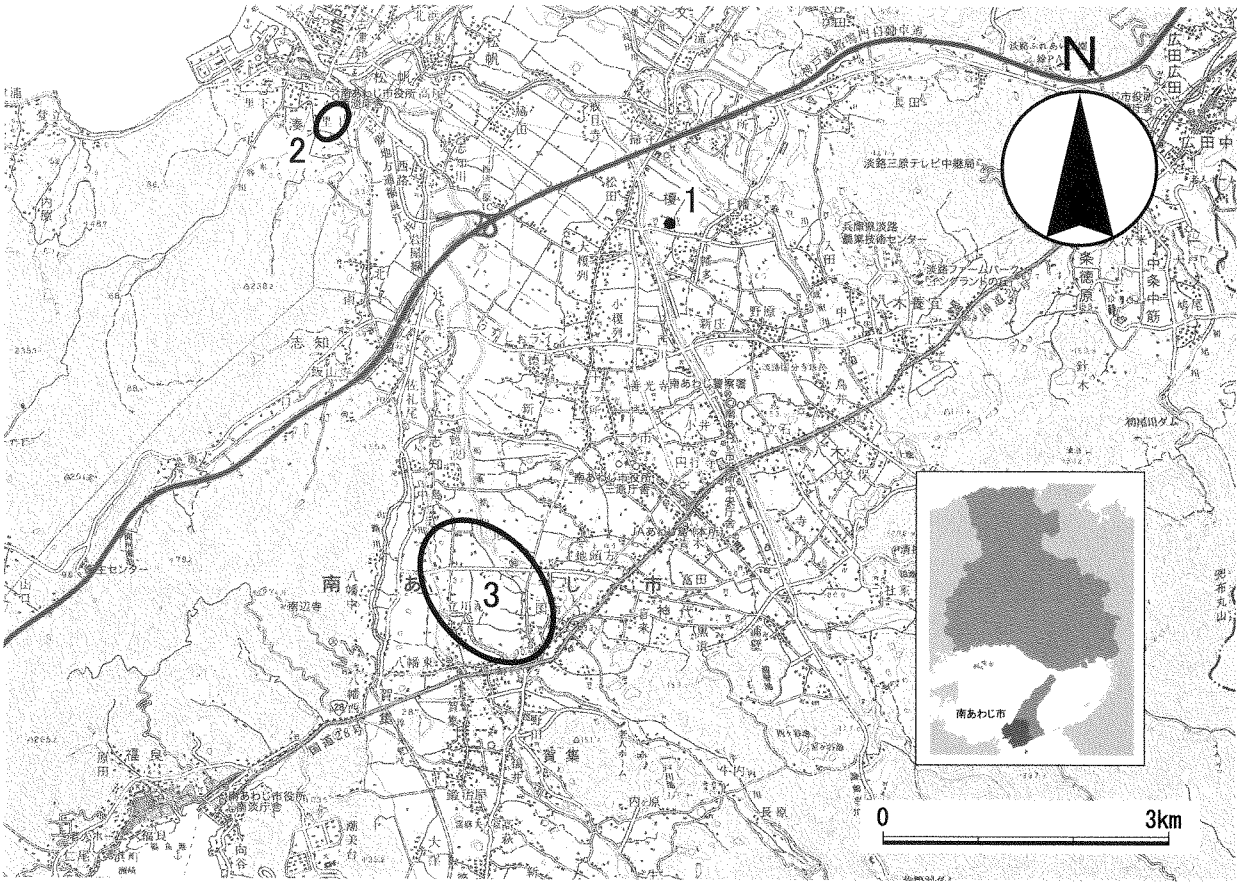
勾玉作りの様子（広田市民交流センター）

第２章　埋蔵文化財調査の成果

第１節　埋蔵文化財調査一覧表および調査位置図

番号	事業名	内容	面積	担当者	遺跡名	所在地１	所在地２	調査期間	調査成果
1	南あわじ市地域密着型特別養護老人ホーム・デイサービスセンター建設事業（民間）	本発掘 確認	310 ㎡ 12 ㎡	山崎	おのころ島遺跡	榎列	下幡多	平成 26 年 4 月 21 日～5 月 8 日	古墳時代後期の遺構・遺物確認。
2	経営体育成基盤整備事業（湊里地区）	本発掘 立会	3,989.3 ㎡ 306.4 ㎡	定松・的崎・山崎	平石遺跡	湊	里	平成 26 年 6 月 9 日～平成 27 年 2 月 6 日	縄文時代前期～中世の遺構・遺物確認。
3	経営体育成基盤整備事業（国衙地区）	確認	452 ㎡	坂口	嫁ヶ渕遺跡・木辺遺跡・長手遺跡・国衙廃寺跡	神代～賀集	国衙～立川瀬	平成 26 年 6 月 16 日～11 月 7 日	弥生・古墳・奈良・平安時代、中世の遺構・遺物確認。
	ドラッグストアー建設事業（民間）	試掘	16 ㎡	山崎		賀集	八幡東	平成 26 年 10 月 16 日	遺構・遺物未確認。
	八木榎列 14 号管渠布設事業	立会	500 ㎡	坂口		八木	立石	平成 26 年 11 月 13 日～11 月 21 日	遺構・遺物未確認。
	集合住宅建設事業（民間）	分布	0.2ha	坂口		八木	立石	平成 26 年 11 月 28 日	土師器・須恵器片をわずかに採集。
	基盤整備促進事業（八幡北地区）	分布	19.0ha	坂口	石ヶ坪遺跡	賀集	八幡北	平成 27 年 1 月 16 日～2 月 7 日	須恵器・土師器・石器・サヌカイト等を採集。

調査一覧表



調査位置図

第２節　主な埋蔵文化財調査の成果

１　おのころ島遺跡－７・８次調査－

所 在 地　榎列下幡多字下幡多 804 番地１外
事 業 名　南あわじ市地域密着型特別養護老人ホーム・
　　デイサービスセンター建設事業（民間）
担 当 者　山崎裕司
種　　別　本発掘・確認調査
調査期間　平成 26 年４月 21 日～５月８日
調査面積　310 ㎡＋確認調査 12 ㎡

調査の位置

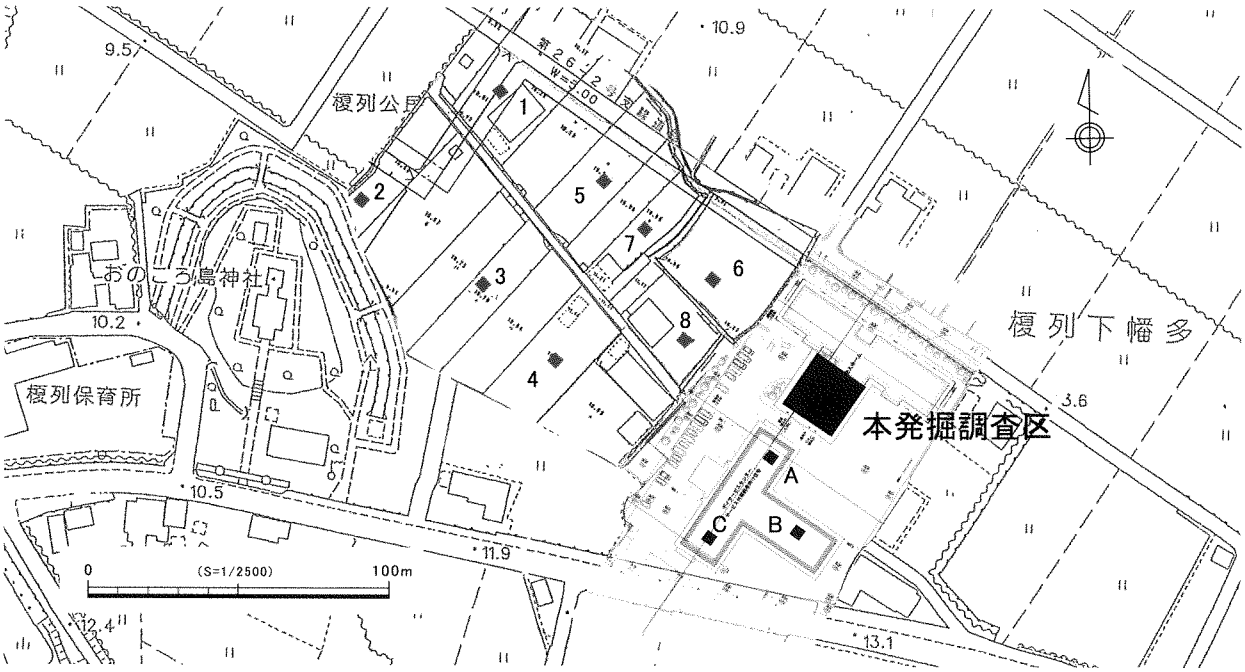
１．調査内容

おのころ島遺跡は三原平野北東部、三原川中流域右岸・成相川中流域左岸の低平な三角州と扇状地の境界付近に位置する縄文時代～中世の遺跡である。

事業地西側に隣接する防災公園（おのころコミュニティパーク）建設に伴う確認調査（６次調査）では、調査区６で古墳時代後期を中心とする遺物包含層が確認され、本事業地北部についても遺跡範囲に含まれると推定されたため、特別養護老人ホーム建設事業により影響を受けると想定される範囲について、記録保存の本発掘調査（７次調査）を行うことになった。

また当調査と並行して事業地南部のデイサービスセンター建設事業に伴い、調査区Ａ～Ｃにおいて確認調査（８次調査）を行ったが、遺構面、遺物包含層は確認できなかった。確認調査区Ａ・Ｂでは、本調査区よりさらにベース面が下がり、氾濫原と考えられる土層堆積を示していた。

遺構１は流路状、遺構２は平坦な棚状を呈し、遺構１は出土遺物が少なかったが、遺構２は残りの良



調査区設定図

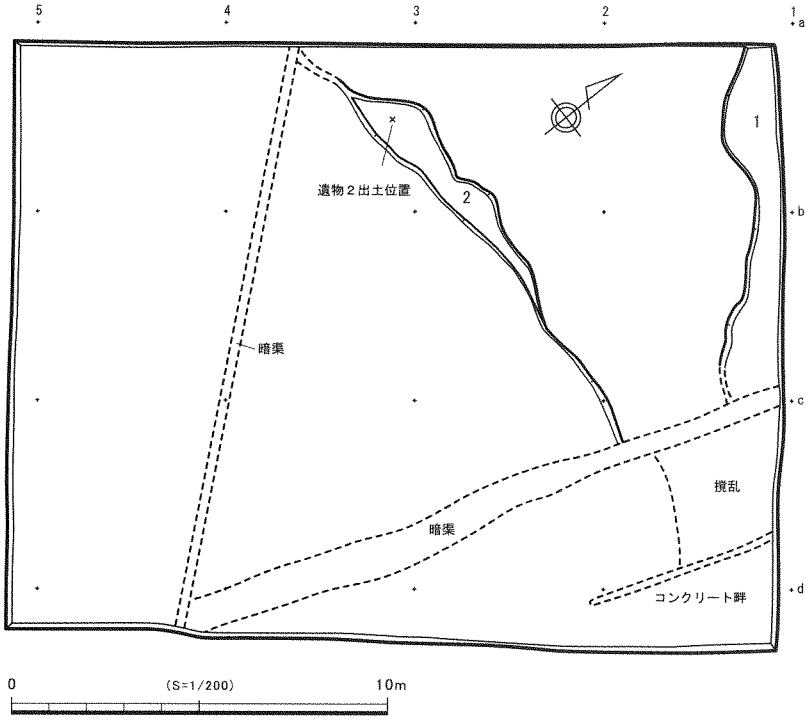
い６世紀初頭前後の土器が多く出土している。遺構２の南側は確認調査区Ａ・Ｂへ向かって次第にベース面が下がっていく。

２．まとめ

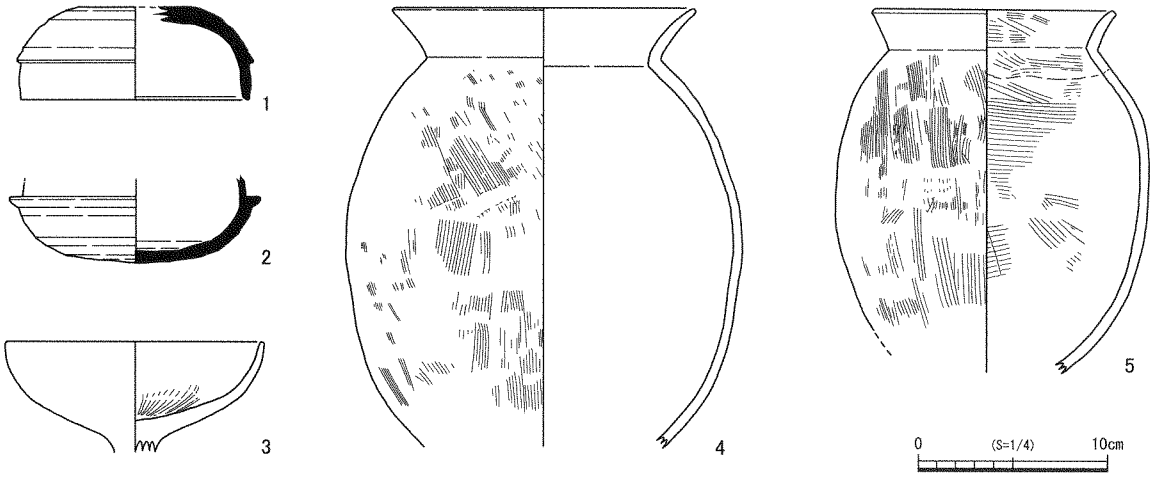
これまでの調査結果から調査地周辺は成相川の氾濫原で、居住地としては適さない環境であったと考えられる。しかし棚状を呈する遺構２からは多くの土器が出土しており、ここで何らかの行為や作業を行っていたと考えられる。

以前、調査地内には出湧（でゆ）と呼ばれる湧水が存在し、南側の扇状地の伏流水が湧出する場所であった。水場としての利用、あるいは祭祀的遺物は現在の所未発見であるが、水に関する祭祀が行われた可能性も考えられる。

（山崎）



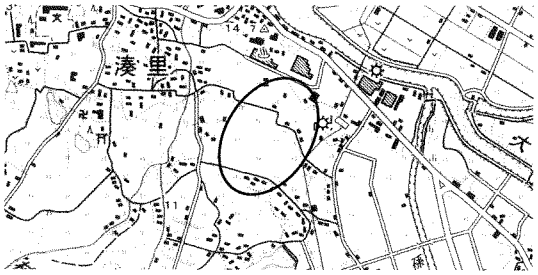
調査区平面図



遺構２　出土遺物

2　平石（ひらいし）遺跡－５次調査－

所 在 地　湊里字犬ノ子外
事 業 名　経営体育成基盤整備事業（湊里地区）
担 当 者　定松佳重・的崎薫・山崎裕司
種　　別　本発掘調査＋立会調査
調査期間　平成26年6月9日～平成27年2月6日
調査面積　3,989.3㎡＋立会調査306.4㎡

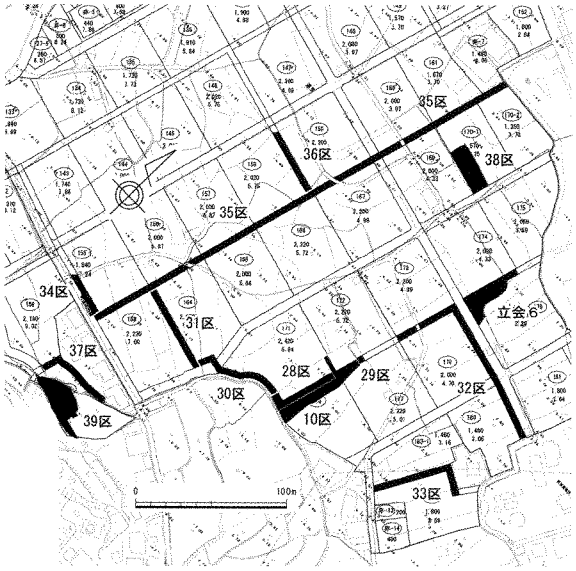


調査の位置

1．調査内容

本調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野が播磨灘に面し、主要河川である大日川と三原川が合流する左岸に位置する。

平成21年度に実施した遺跡範囲確認調査では弥生時代～中世の遺構・遺物を広範囲で確認し、事業実施によって遺跡に影響の及ぶ範囲のみ平成24年度より本発掘を行っている。３年目にあたる平成26年度は最終年度となり、28～39区の調査を行った。以下、主要な調査区のみ記述する。



調査区設定図

[28区]　(194㎡)

排水路の調査区である。平成24年度調査10区の西側に隣接する。10区では多くの遺構を確認し、本地区でもそれらの続きを確認した。

遺構１　10区から続く、最大幅2.5ｍ、最大深1.4ｍを測る流路である。10区では弥生時代終末期～古墳時代中期・９世紀代・中世と大きく３時期に分類できたが、今回は中世の堆積層は確認できなかった。出土遺物は東阿波型土器**3**や讃岐系を含む弥生土器・土師器**4**～**8**・須恵器**1**～**2**・製塩土器（脚台Ⅲ式）などである。

遺構26　幅1.2ｍ、最深36cmを測る。流水は確認できず、性格不明である。土師器・須恵器・瓦器が出土した。

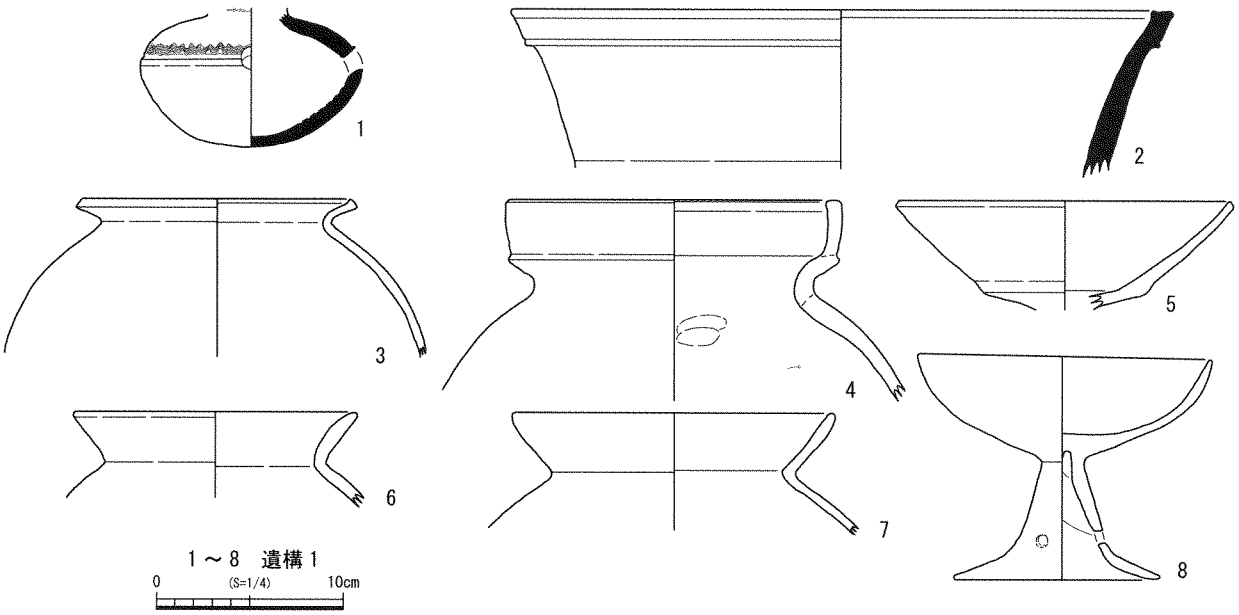
遺構54　3.5ｍ×検出幅1.5ｍ、深さ18cmを測るいびつな方形の土坑である。須恵器・土師器・瓦器などが出土するが、完形に近い古墳時代の土器**9**・**10**も数点出土している。

掘立柱建物は10・28区合わせて再検討した結果、23棟確認できた。

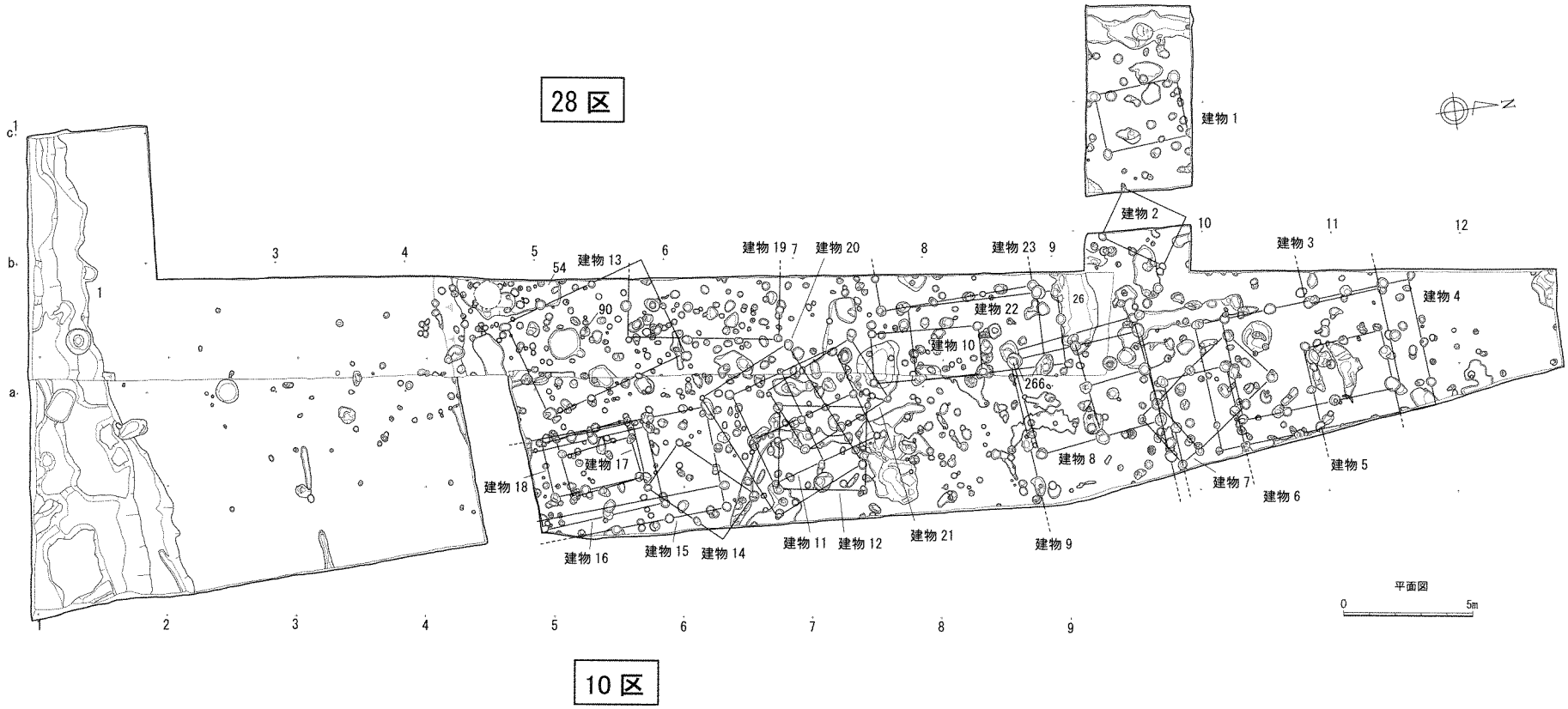
建物１　梁行１間（2.2ｍ）・桁行２間（1.1・2.2ｍ）で、Ｎ４°Ｗを測る。
建物２　梁行１間（2.0ｍ）・桁行２間（1.3ｍ）で、Ｎ34°Ｅを測る。
建物３　２間（1.5ｍ）で、Ｎ85°Ｅを測る。
建物４　梁行２間（2.0ｍ）・桁行４間（1.3～1.8ｍ）で、Ｎ４°Ｗを測る。北東南の３辺に下屋が付く。
建物５　梁行２間（1.6ｍ）・桁行２間以上（1.5ｍ）で、Ｎ85°Ｅを測る。
建物６　梁行１間（1.2～1.4ｍ）・桁行２間以上（1.5～1.8ｍ）で、Ｎ85°Ｅを測る。

建物７　梁行１間（2.3ｍ）・桁行２間（1.9ｍ）で、Ｎ36°Ｗを測る。南西面に下屋が付く。
建物８　梁行２間（2.3ｍ）・桁行２間（1.9ｍ）で、Ｎ8.5°Ｗを向く。南側の桁柱が他よりも規模が小さくなる。遺構266から土師器12～14、青磁碗15が出土している。
建物９　梁行２間（2.4ｍ）・桁行２間以上（1.8～2.6ｍ）で、Ｎ85°Ｅを測る。
建物10　梁行１間（1.7ｍ）・桁行２間（2.0ｍ）で、Ｎ4.5°Ｅを測る。
建物11　梁行２間（1.9ｍ）・桁行２間（1.8ｍ）で、Ｎ17°Ｗを測る。総柱建物である。
建物12　梁行２間（1.8・2.0ｍ）・桁行２間（1.6ｍ）で、Ｎ10°Ｅを測る。東に下屋が付く。
建物13　梁行２間（1.4～2.0ｍ）・桁行３間（1.4～1.8ｍ）で、Ｎ17°Ｗを測る。
建物14　梁行１間（2.1ｍ）・桁行２間（1.7ｍ）で、Ｎ43°Ｅを測る。
建物15　梁行２間（1.4～1.7ｍ）・桁行３間以上（2.2～2.6ｍ）で、Ｎ4°Ｗを測る。東に下屋が付く。
建物16　梁行２間（1.5ｍ）・桁行２間（2.3～2.5ｍ）で、Ｎ5°Ｗを測る。
建物17　梁行１間（1.7ｍ）・桁行２間（1.3～1.5ｍ）で、Ｎ8.5°Ｗを向く。西に下屋を持つ。
建物18　梁行１間（2.2ｍ）・桁行２間（1.3・2.4ｍ）で、Ｎ4°Ｗを測る。
建物19　梁行１間以上・桁行３間（1.4～2.1ｍ）で、Ｎ9°Ｅを測る。東に下屋が付く。
建物20　梁行２間（1.8ｍ）・桁行３間（1.5～1.9ｍ）で、Ｎ65.5°Ｅを測る。
建物21　梁行２間（1.4～1.9ｍ）・桁行２間（1.2ｍ）で、Ｎ24°Ｗを測る。
建物22　梁行１間（2.5ｍ）・桁行２間（2.3ｍ）で、Ｎ1.5°Ｅを測る。北に下屋が付く。
建物23　３間（1.7～1.9ｍ）・１間以上（1.3ｍ）で、Ｎ0.5°Ｗを測る。

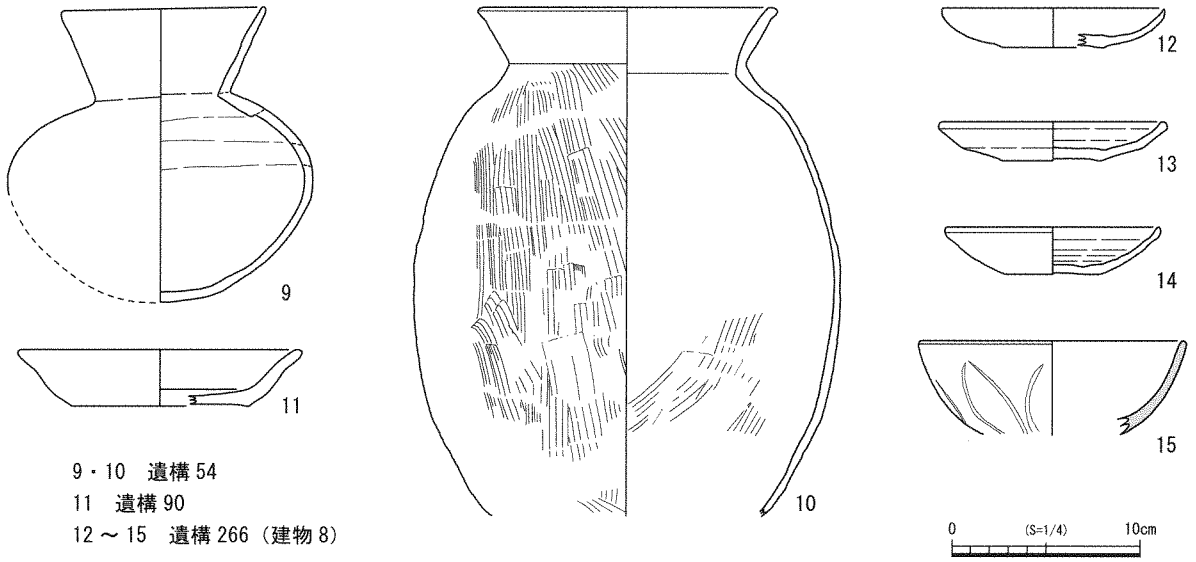
10区では建物10～12は瓦器が出土しないことから平安時代後半と考えていたが、並存関係にある建物からは瓦器が出土することがわかったため、再度10区も含めて前後関係を推測する。建物３・６・16→12・19（12世紀半ば）→11・13→１・４・15（14世紀後半）→８・17→５・９・18・23→22（15～16世紀）と思われる。建物２・７・10・14・20・21からは瓦器が出土しないことから、建物３・６・16群より前段階の平安時代後半と思われるが、切り合いがないため前後関係は不明である。　（定松）



28区　出土遺物１


28 区
10 区
建物 1
建物 2
建物 3
建物 4
建物 5
建物 6
建物 7
建物 8
建物 9
建物 10
建物 11
建物 12
建物 13
建物 14
建物 15
建物 16
建物 17
建物 18
建物 19
建物 20
建物 21
建物 22
建物 23
54
90
266
26
平面図
0
5m

10 区・28 区　平面図



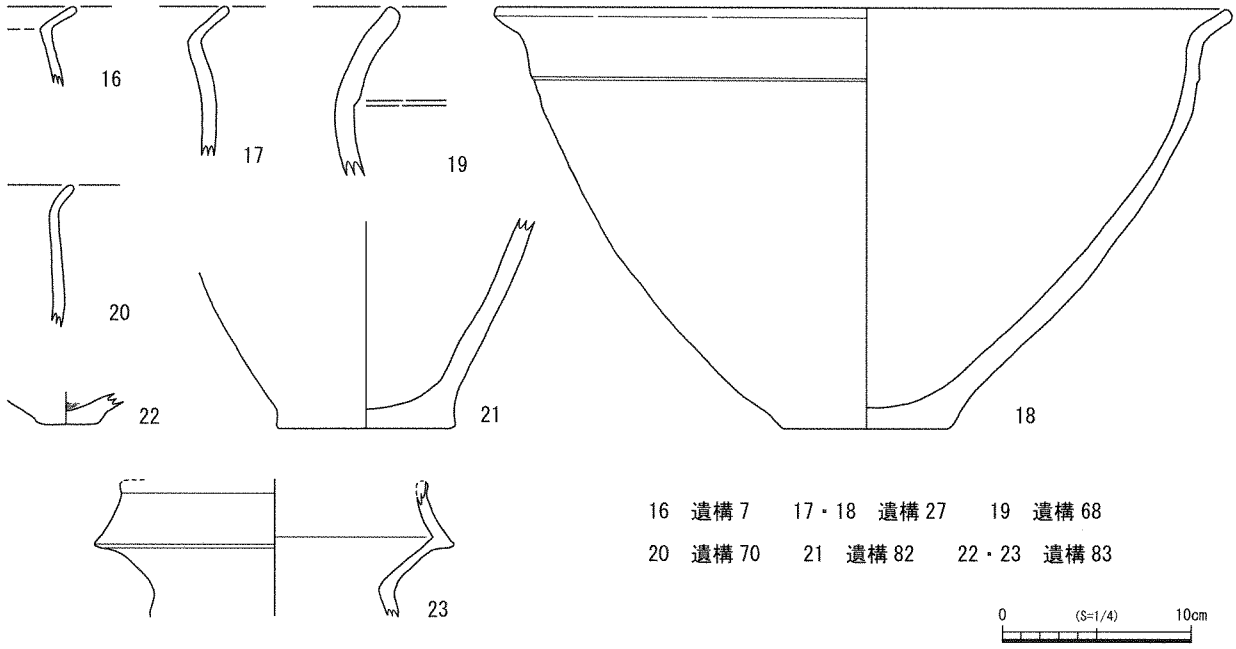
9・10　遺構 54
11　遺構 90
12～15　遺構 266（建物 8）

28 区　出土遺物 2

[32 区]　(527.4 ㎡)

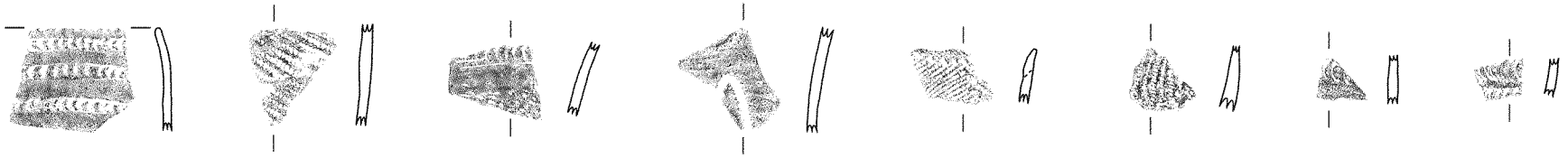
排水路の調査区でＬ字型を呈する。調査区東部の土坑状の遺構 27・68・70、溝状の遺構 82 からは弥生時代前期頃の土器 **17** ～ **21** が出土している。また溝状の遺構 83 からは弥生時代終末期の土器 **22** ・ **23** が出土しており、この近くでは東西１間以上×南北２間以上の掘立柱建物が復元され、出土遺物は無く詳細不明であるが、同時期の可能性が高い。

調査区西部の遺構 14（９～12 層）は遺構６へ続く流路状の遺構で、縄文時代前期の土器を多く含む。**24**・**26**・**30**・**31** には爪形文が施される。遺構８・10・11・17 は出土遺物が少なく詳細不明であるが、古代～中世の遺構と思われる。遺構７の下層からは弥生時代中期の土器 **16** が出土しており、この時期の河道と考えられる。　(山崎)



16　遺構 7　　17・18　遺構 27　　19　遺構 68
20　遺構 70　　21　遺構 82　　22・23　遺構 83

32 区　出土遺物 弥生土器



24 ～ 31 遺構 14

0 (S=1/4) 10cm

E壁

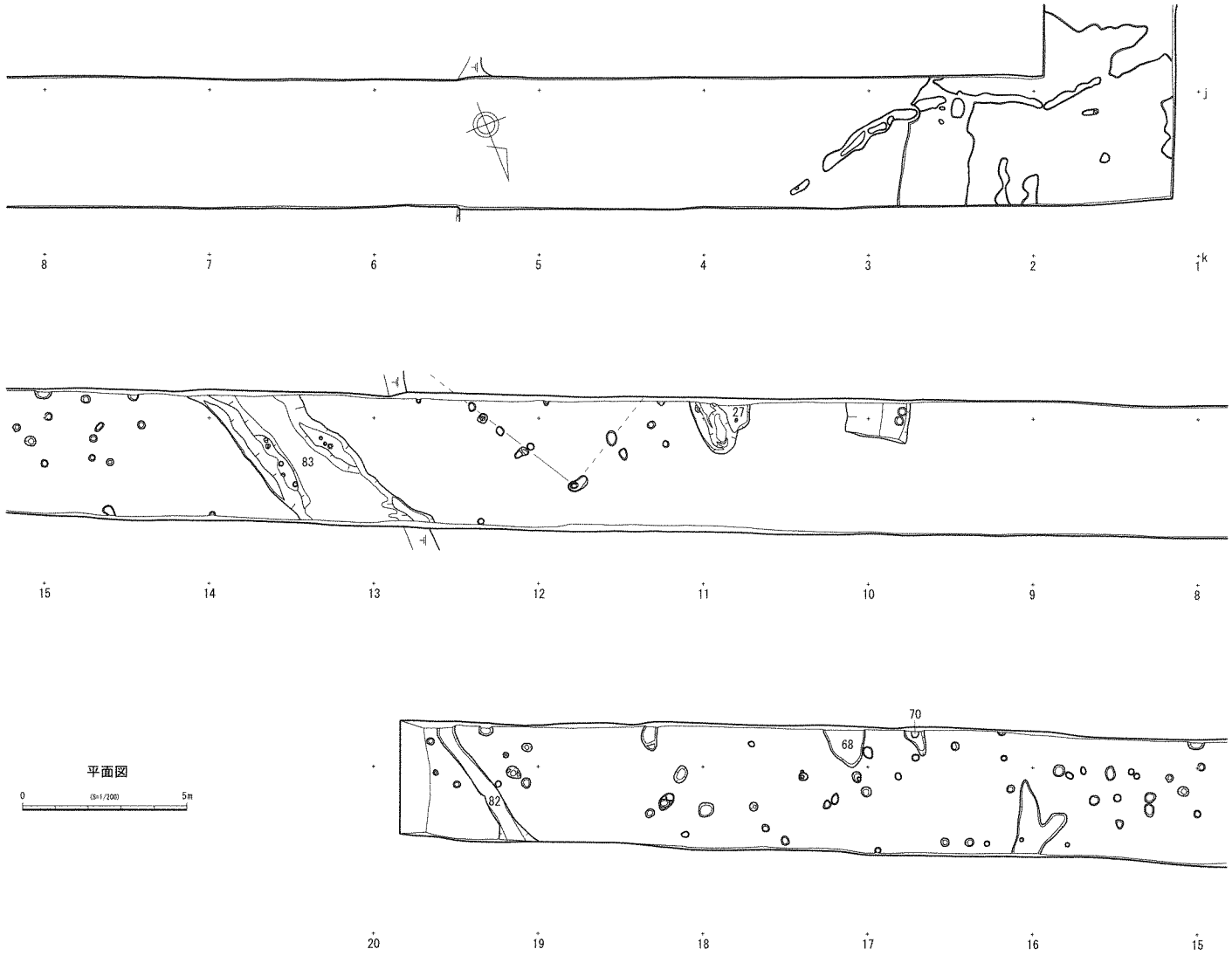
1. 明黄褐色2.5Y7/6砂質土（Fe・Mn少し含む、床土）
2. 黒褐色10YR3/1粘砂質土＋褐灰色10YR5/1砂質土撹乱状に混じる
3. 黄灰色2.5Y6/1砂質土（Mn含む）
4. 褐灰色10YR5/1砂質土（Mn少し・腐り礫少し含む、旧耕土）
5. にぶい黄色2.5Y6/3細砂質土（Fe・Mn少し含む、旧床土）
6. にぶい黄橙色10YR6/3細砂質土（Fe・Mn少し含む、旧床土）
7. 黄灰色2.5Y6/1細砂質土
8. 黒褐色10YR3/1粘砂質土（腐り礫少し含む）
9. 黒褐色10YR3/2粘砂質土（遺物少し含む）
10. 黒褐色10YR3/1粘砂質土
11. 褐灰色10YR4/1粘細砂質土（Fe少し含む）
12. 礫混黒褐色10YR3/1粘細砂質土（φ2～5cm以下礫含む）
13. 礫混明黄褐色10YR6/8粗砂質土（Fe・φ2～5cm以下礫含む）
14. 礫混褐色10YR4/6細砂質土（Fe・φ2～5cm以下礫含む）

4.000m

層序図 (1/40) 50cm 0 5m (S=1/200)

平面図 0 (S=1/200) 5m

32 区西部　平面・層序図　出土遺物 縄文土器


j
k
8
7
6
5
4
3
2
1
83
27
15
14
13
12
11
10
9
8
70
68
82
平面図
0
(S=1/200)
5m
20
19
18
17
16
15

32 区東部　平面図

［35区］（1,174.2㎡　延べ2,218.2㎡）

遺跡を南北に縦断する排水路の調査区である。

1～4ブロックでは時代が不明な溝と小土坑を確認した。

6～14ブロックでは第1遺構面で掘立柱建物1などを確認した。

建物1　2面に下屋が付く、桁行1間以上（2.2m）×梁行2間（2.2m）の建物である。出土遺物は少ないが、瓦器が出土し、12世紀代と思われる。

第2遺構面では小土坑と溝2条を確認した。断面観察により上層から掘り込まれる小土坑も確認し、遺構面は3面あることが判明した。溝26・52からは弥生時代中期初頭と思われる土器が出土している。

16～31ブロックでは2面調査を行った。断面観察で弥生時代中期～古代の遺物が含まれる旧河道が多く見つかった。第1遺構面では、旧河道埋没後に建てられた中世の掘立柱建物2～5や旧河道・溝などを確認した。

建物2　2間以上×2間の側柱建物である。1間の柱間は1.6～1.9mである。

建物3　3間×1間以上の建物で、1間の柱間は1.8～2.4mである。

建物4　西側に下屋が付く3間以上×2間以上の建物で、1間の柱間は1.8～2.4m、13世紀代の瓦器などが出土している。

建物5　西側に下屋が付く2間×1間以上と推測される建物で、1間の柱間は2.15mである。

掘立柱建物2～5はすべて調査区外へと続くため建物全体の規模などは不明であるが、瓦器が含まれることから12～13世紀の範疇と考える。また、建物2と建物3は重なっていることから時期差が考えられるが、その前後関係は不明である。

第2遺構面では掘立柱建物6と竪穴住居1・溝などの遺構を確認した。

建物6　1間×1間以上で、1間の柱間が2.0～2.3mの建物である。遺物が出土していないため、時代は不明である。

竪穴住居1　直径4.5～5.0mのややいびつな円形を呈し、床面には4本の主柱穴と中央土坑140を確認した。4本の主柱穴はいずれも50㎝～70㎝と深い。中央土坑は長辺86㎝×短辺54㎝の楕円形を呈し、深さは34㎝である。埋土の下層には炭が多く含まれていた。遺構から太型蛤刃石斧やわずかではあるが弥生時代中期後葉の遺物が出土している。中央土坑の両側には相対する2つの柱穴があり、松菊里型住居の形態と考えられる。

溝150　23～27ブロックにかかる大きな旧河道で、弥生時代後期の土器やサヌカイト片が含まれる。

溝153　断面観察より上面は幅6.2mの古墳時代中期の溝で、多くの土師器**32**～**35**と滑石製品4点**36**～**39**が出土している。須恵器は1点も含まれていない。滑石製品は全て有孔円板で、長径1.9～2.3㎝の楕円形の小型品ある。周辺で祭祀が行われたものと考えられる。

16～31ブロックの遺構を時代順に並べると、竪穴住居1（弥生時代中期後葉）→溝150（弥生時代後期）→溝153（古墳時代中期）→18～21ブロック区旧河道（奈良時代）→建物2～5（平安時代後葉～鎌倉時代）となる。

32～37ブロックは調査区のほぼ大半が36区から続く埋没した旧河道にあたる。34～36ブロック東半に堆積した礫のない暗灰黄色細砂には完形に近い古墳時代の土器**40**～**50**と奈良時代の鍋や甕類**51**～**54**が含まれていた。旧河道の上には掘立柱建物7などの遺構を確認した。

建物7　2間以上×1間以上の北側に下屋が付く建物と考えられる。柱間は2.0～2.5mである。柱

穴から土師器や黒色土器Ａ類が出土し、９～10世紀頃と思われる。

38～47ブロックも旧河道にあたる。遺構面を２面調査したが、断面では３面確認できた。第１遺構面では掘立柱建物８や溝などを確認し、床土直下から掘り込まれる遺構であることがわかった。

建物８　１間以上×２間の建物で、柱間は2.3～2.6ｍである。柱穴からは土師器と黒色土器Ａ類が出土し、９～10世紀頃と思われる。

溝204　38～42ブロックにかかる旧河道の一部である。上層にはほとんど礫が含まれず、長い時間をかけて堆積したことがうかがえ、瓦器や備前焼・輸入陶磁器など中世の遺物が含まれる。中層には庄内式土器併行期の讃岐地域の土器や古墳～平安時代の須恵器・土師器・黒色土器・製塩土器・竈・須恵質の管状土錘が含まれていた。下層は遺物が少なく、時代は不明であるが、礫を多く含み、洪水などによる短期間で堆積したと思われる。

第２遺構面では溝などを確認し、弥生時代後期～古墳時代中期の土器が出土している。

第２遺構面より下層にも弥生時代中期～古墳時代中期の遺物が含まれていたため掘削を行ったが、遺構は確認できなかった。

48～50ブロックでは遺構面を２面確認した。どちらの面も遺構は希薄で時代がわかるような遺物は出土していないが、周辺の調査区などから第１遺構面は古代の範疇と考えられる。第２遺構面は遺構面の直上から弥生時代中期の甕や壷が出土しているため、弥生時代中期かそれより古い時代の遺構と考えられる。

51～63ブロックでは遺構面を２面調査したが、断面観察では複数の遺構面がみられた。第１遺構面は耕作土直下、もしくは床土直下で掘立柱建物９～16の７棟と柵列１・溝などを確認した。

建物９　溝224を切る桁行３間×梁行２間以上の側柱建物で、１間の柱間は2.2～2.4ｍである。柱穴から土師器・須恵器・黒色土器・製塩土器が出土し、９～10世紀頃である。

建物10　１間以上×２間の建物で、１間の柱間は2.1～2.7ｍである。柱穴から９世紀末頃の黒色土器椀などが出土している。

建物11　桁行２間以上×梁行２間の側柱建物で、１間の柱間は1.9～2.4ｍである。９～10世紀頃の遺物が出土している。

建物12　３間以上×１間以上の側柱建物で、１間の柱間は1.9～2.4ｍである。８世紀代の須恵器などが出土している。

建物13　３間×１間以上の建物で、１間の柱間は1.4～1.8ｍである。８世紀初頭の須恵器や製塩土器などが出土している。

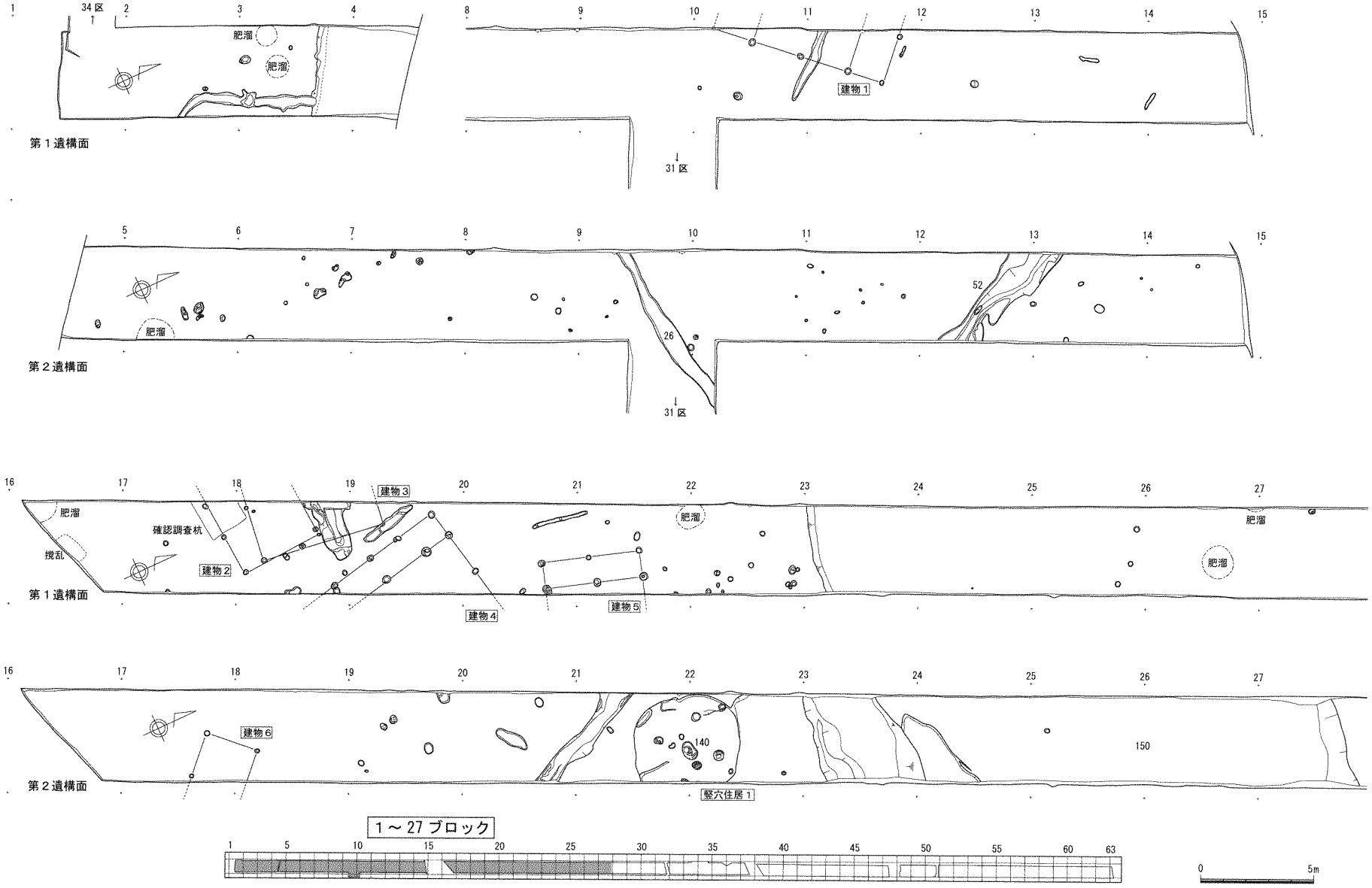
建物14　桁行２間以上×梁行２間の側柱建物で、１間の柱間は2.2～3.0ｍである。建物の柱穴はすべて直径50㎝以上、深さ40㎝以上の大型である。畿内系土師器や須恵器など８世紀末～９世紀初め頃の遺物が出土している。

建物15　桁行３間以上×梁行２間の側柱建物で、１間の柱間は1.8～2.1ｍである。建物12と柱筋が同方位である。８世紀代の遺物が出土している。

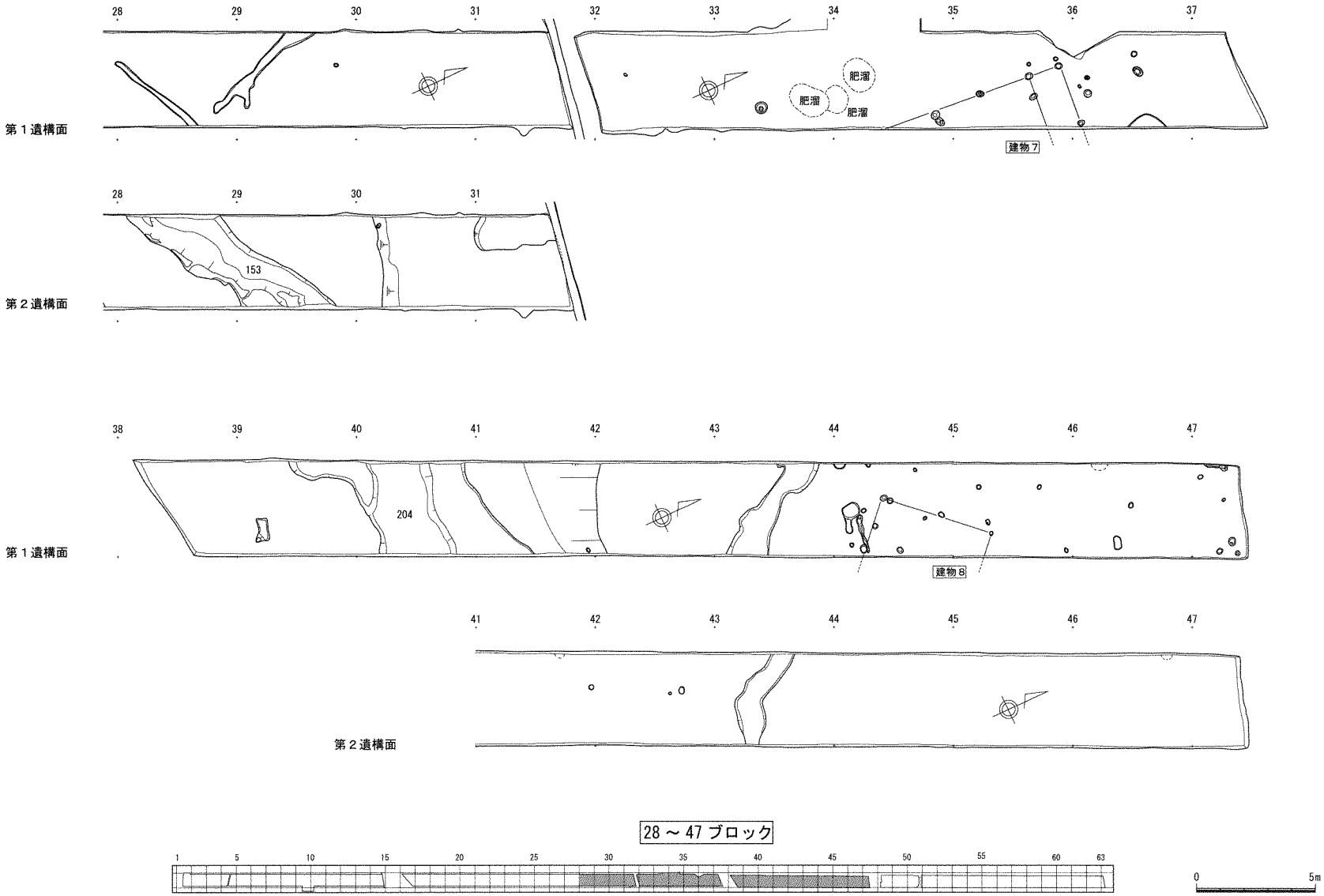
建物16　２間以上×１間以上の建物で、１間の柱間は2.5～2.7ｍである。柱穴から８世紀代の須恵器などが出土し、柱穴350からは都城型の土馬の脚が出土した。

柵列１　建物10に伴う柵列である

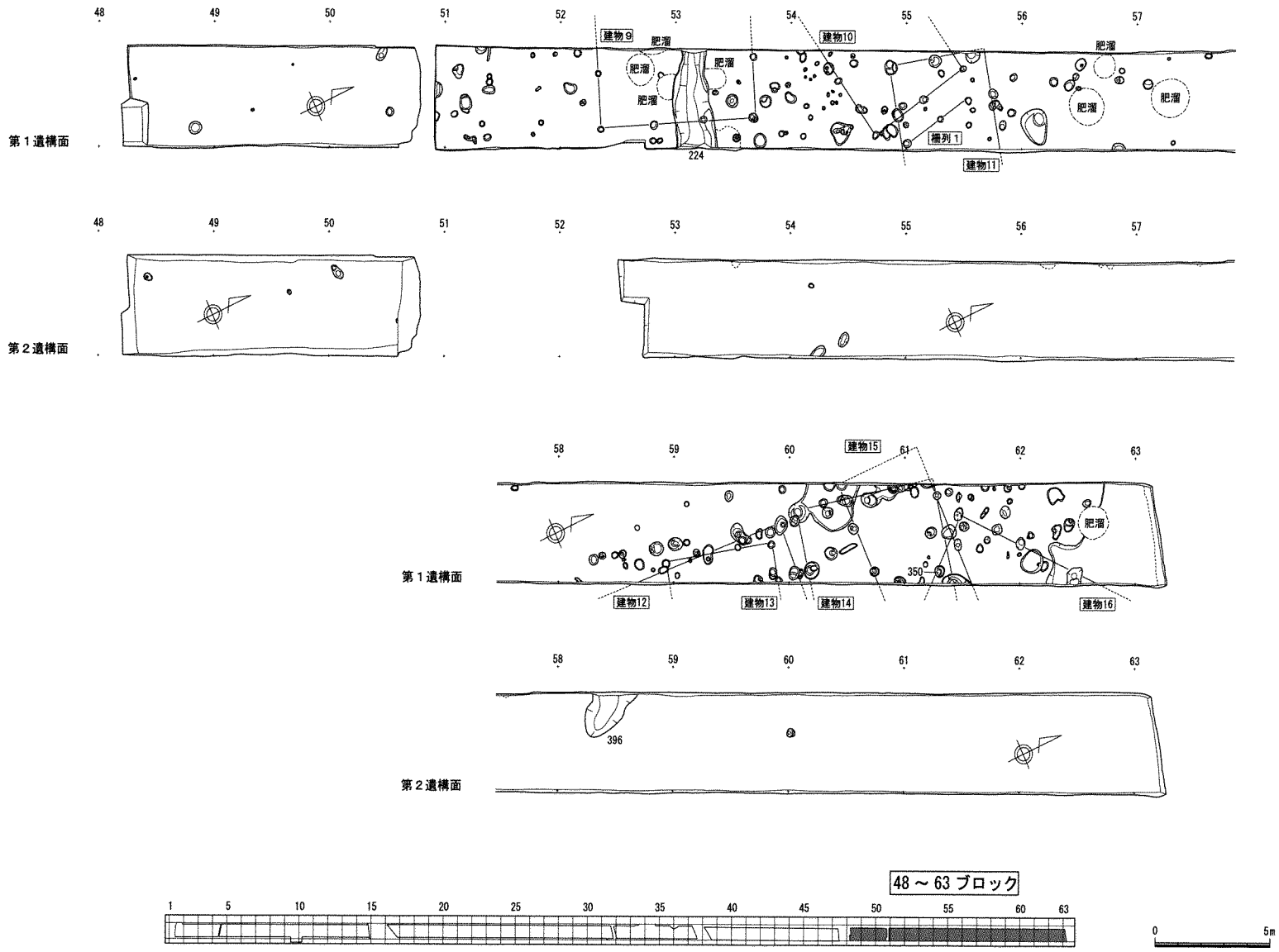
溝224　東西に流れる幅1.0～1.7ｍ、深さ50～60㎝の溝である。須恵器55～57や土師器58～


34区
31区
肥溜
建物1
第1遺構面
52
26
第2遺構面
建物3
確認調査杭
撹乱
建物2
建物4
建物5
建物6
140
150
竪穴住居1
1～27ブロック
0
5m

35区　平面図1


第１遺構面
第２遺構面
第１遺構面
第２遺構面
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
肥溜
肥溜
肥溜
建物７
153
204
建物８
28～47ブロック
1
5
10
15
20
25
30
35
40
45
50
55
60
63
0
5m

35区　平面図２

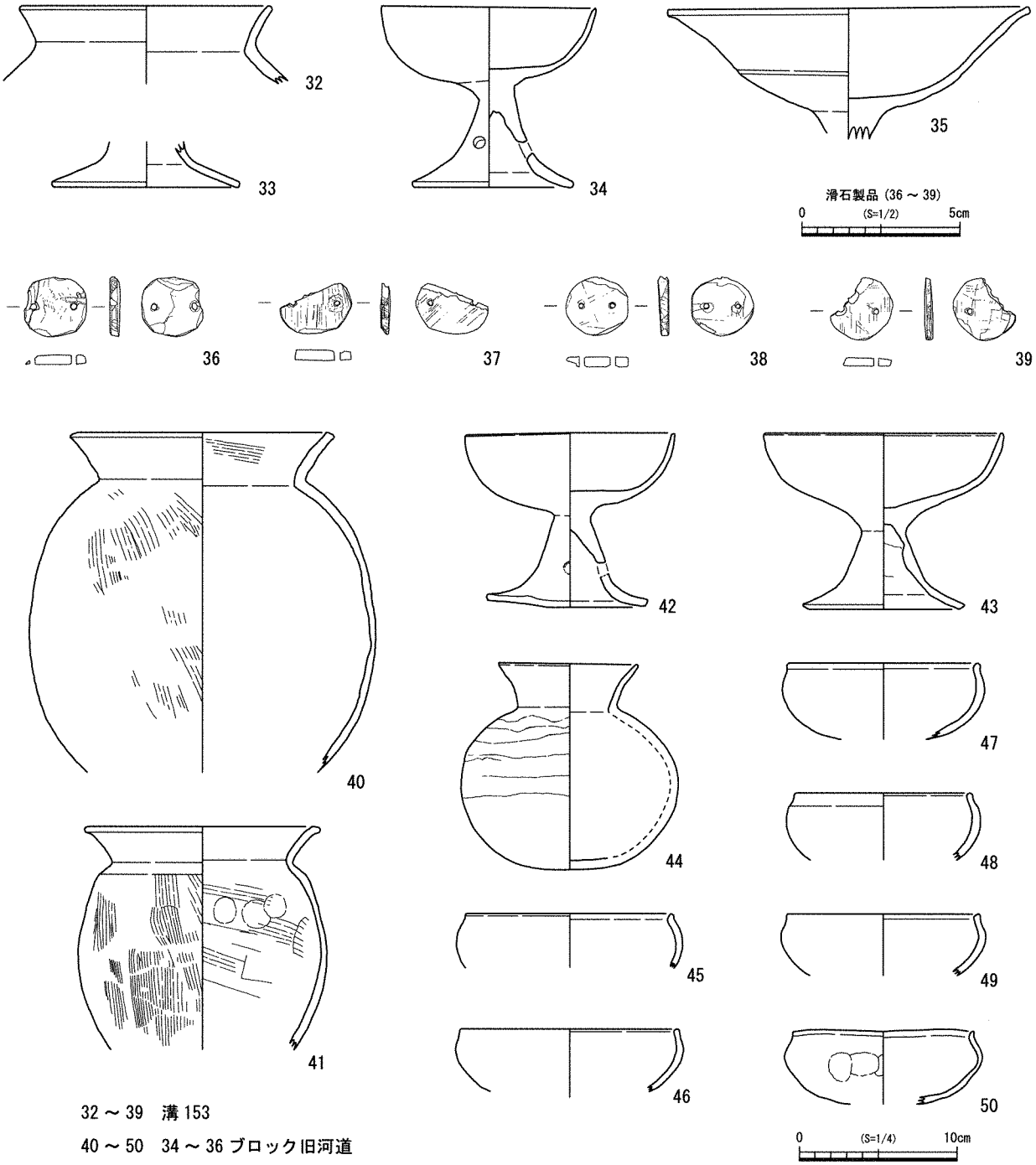

第１遺構面
第２遺構面
第１遺構面
第２遺構面
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
建物９
建物10
建物11
建物12
建物13
建物14
建物15
建物16
肥溜
柵列１
224
350
396
48～63ブロック
1
5
10
15
20
25
30
35
40
45
50
55
60
63
0
5m

35区　平面図３

63・丸底Ⅱ～Ⅳ式や甕形の製塩土器 64 ～ 72・移動式竈 73・甑 74 など多くの遺物が含まれていた。8 世期前半と考えられる。

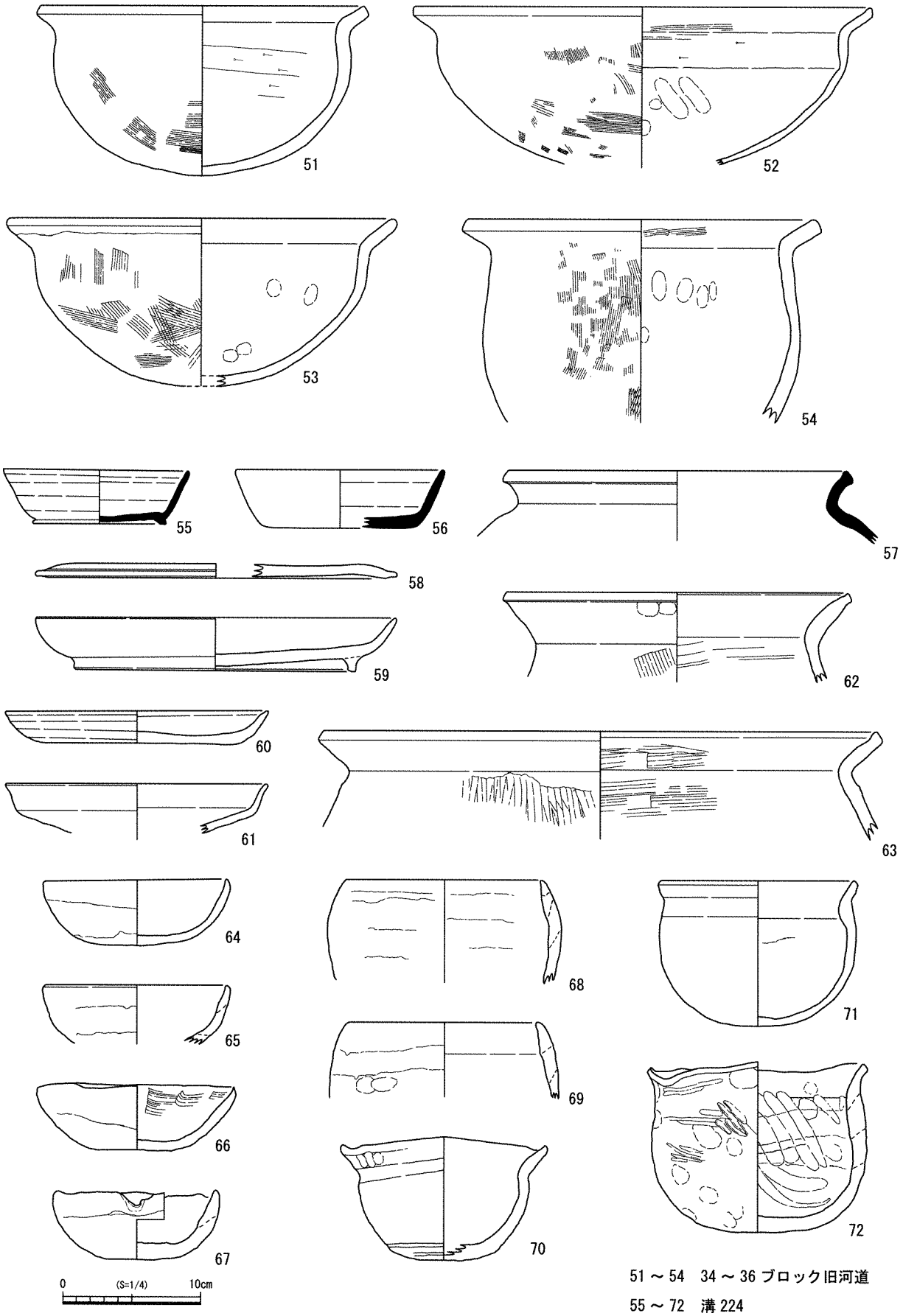
第 1 遺構面の掘立柱建物は時期差があり、時代順に並べると、建物 13（8 世紀初頭）→建物 12・15（8 世紀前半）→建物 16（8 世紀後半）→建物 14（8 世紀末～ 9 世紀初頭）→建物 10（9 世紀後半～末）→建物 9・11（9 ～ 10 世紀）と考えられる。

第 2 遺構面は弥生時代中期後半～後期の遺構面で、土坑 396 から弥生時代後期の遺物が出土している。（的崎）



32 ～ 39　溝 153
40 ～ 50　34 ～ 36 ブロック旧河道

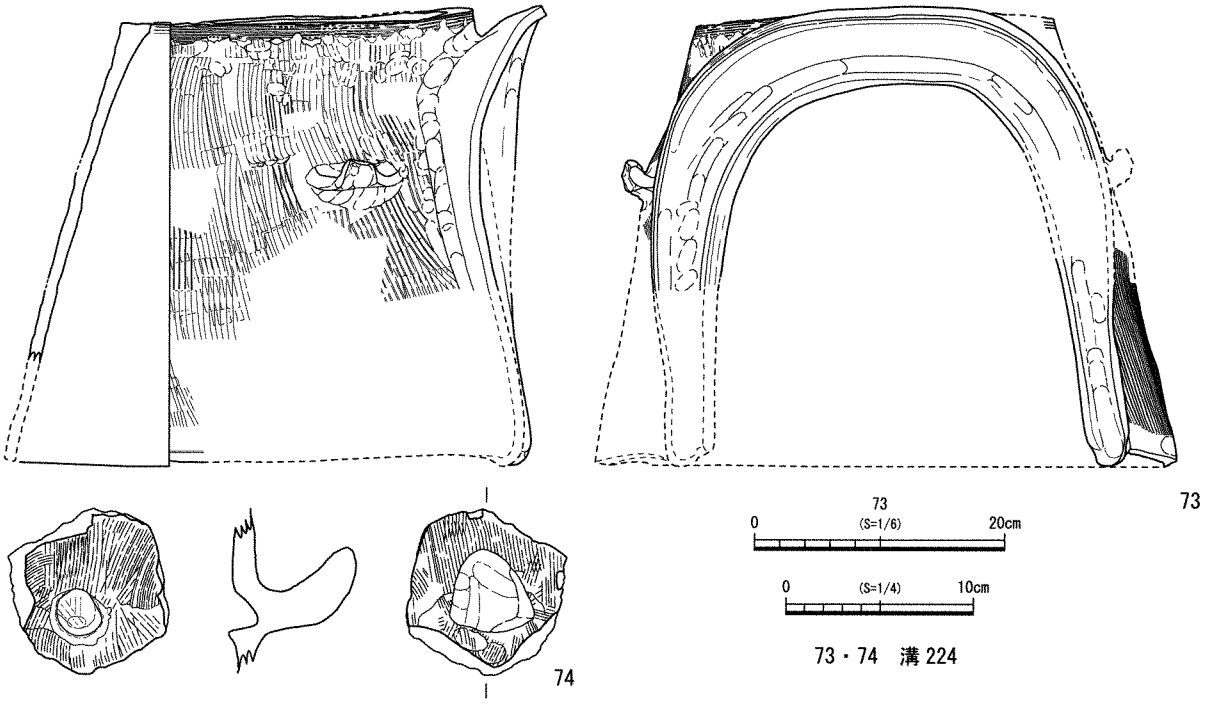
35 区　出土遺物 1



51 ～ 54　34 ～ 36 ブロック旧河道

55 ～ 72　溝 224

35 区　出土遺物 2



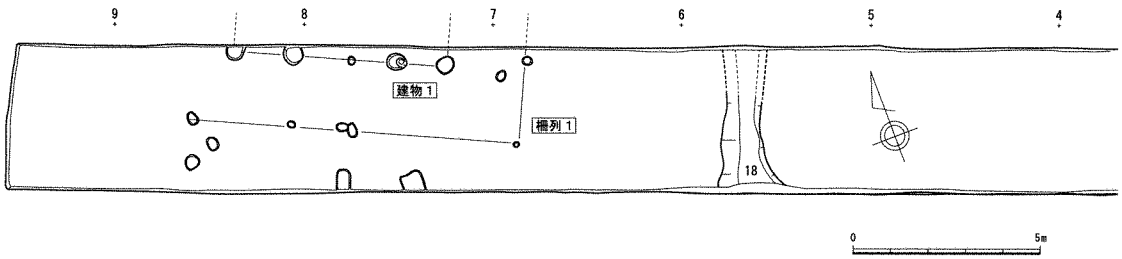
35 区　出土遺物 3

[36 区]　(171.2 ㎡　延べ 223.9 ㎡)

排水路の調査である。調査区全域が柿木谷川の旧河道にあたる。５ブロックから西側において埋没した旧河道の上に掘立柱建物１棟と柵列・溝などを確認した。

建物１　柱列を１列検出し、調査区の北側に続く建物と推測する。建物１を囲むように柵列１がＬ字状に並ぶ。建物の柱穴からはわずかな土師器が出土しているのみであるが、周辺には中世以降の遺物が全く出土していないことから、平安時代以前と思われる。

溝 18 からは７世紀代の須恵器や土師器、丸底Ⅲ式の製塩土器などが出土した。　(的崎)



36 区　平面図

[38 区]　(253.5 ㎡)

圃場面の調査である。掘立柱建物４棟と溝２条・柵列・土坑などを確認した。

建物１　桁行２間×梁行２間の側柱建物で１間の桁間が 2.5 ～ 3.5 ｍに対し、梁間は 1.6 ～ 1.9 ｍと狭い。柱穴から８世紀代の土師器・須恵器・製塩土器が出土している。

建物２　調査区の北側へと続く桁行２間以上×梁行２間の側柱建物と考えられるが、総柱建物の可能性もある。柱穴からは土師器・須恵器・製塩土器・焼土塊が出土し、８世紀末頃と思われる。

建物３　桁行３間以上×梁行２間の側柱建物で１間の柱間は2.0～2.1ｍである。梁行が4.2ｍあり、柱穴はいずれも直径50㎝以上、深さは40㎝以上を測り、38区で一番大きな建物と考えられる。柱穴からは土師器・須恵器・製塩土器・焼土塊が出土し、８世紀代の範疇である。土師器の中には畿内系土師器が含まれ、建物の規模が大きいことから官衙的な建物の可能性が考えられる。

建物４　桁行４間×梁行２間の側柱建物であり、ややいびつである。１間の柱間は1.6～3.1ｍである。柱穴から土師器・須恵器・製塩土器が出土している。

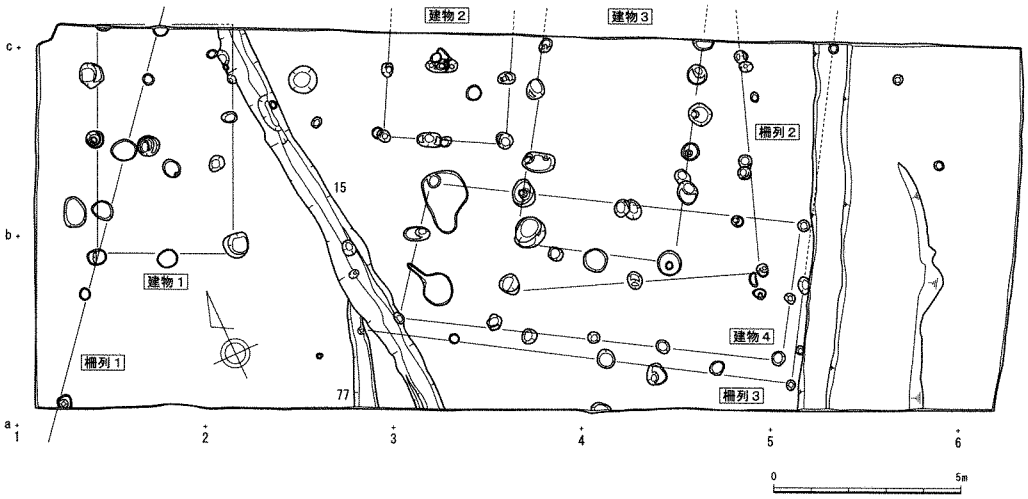
柵列１　1.7～2.9ｍ間隔に柱穴が並ぶ。建物４の梁行と同方位であることから、建物４に付随するものと考えられる。

柵列２　2.8～3.3ｍ間隔で柱穴がＬ字形に並んでいるが、この柵列に対応する建物は無く、調査区の北側に別の建物の存在が想定される。

柵列３　2.0～4.0ｍ間隔で柵列２同様にＬ字形に並ぶ。建物４に沿うように並んでいるが、おそらく建物３を囲う柵列と考えられる。

38区の建物４棟は全て８世紀代の範疇であり、建物が重なっていることから少なくとも３時期は考えられる。しかし、柱穴に切り合いがみられないことや時期がわかる遺物が少ないことから明確な前後関係は掴めない。建物１～３は主軸をやや東に振る南北棟ではあるものの同方位ではなく、建物４は東西棟である。製塩土器で比較してみると、建物１の柱穴に含まれる製塩土器がやや薄手であり、丸底Ⅳ式よりは丸底Ⅲ式に近いことから建物１が一番古く８世紀前半の可能性がある。また、建物２・３では焼土塊が多くの柱穴に含まれていたが、建物１・４には含まれていなかった。以上のことから建物１・柵列２（８世紀前半）→建物４・柵列１→建物３・柵列３→建物２（８世紀末）の変遷が考えられる。また、これらの建物と35区の建物12～16は同一集落にあり、わずかではあるが官衙的要素の遺物や建物が存在していることから、南あわじ市の古代を構築する上で重要な建物群となるかもしれない。

そのほかの遺構として、溝15は幅0.7～1.0ｍ、深さ25～30㎝の直線的な溝である。遺構上層には古墳時代前期～８世紀頃の遺物が混じっているが、下層は古墳時代前期の遺物のみであった。下層遺物には讃岐地方特有の甕が含まれ、古墳時代初頭でも古い段階と考えられる。溝77は幅0.5ｍ、深さ約７㎝で溝15に切られている。古墳時代前期の遺物が出土している。　（的崎）



38区　平面図

［39区］ (364.8㎡)

当初立会調査を予定していたが、遺構を確認したため、本発掘調査を行った圃場面の調査区である。遺物包含層からは、土師器・須恵器・瓦器・太型蛤刃石斧75・石鏃などが出土した。遺構は掘立柱建物10棟、塀2列、土坑・溝を確認した。

建物1　2間以上・3間以上で、N 16°Wを測る。柱間が均等でない（1.5～1.8m）ことから、柵列の可能性もある。土師器・須恵器・瓦器が出土した。

建物2　梁行1間以上・桁行5間（1.5・1.8m）で、N 67°Eを測る。東に下屋が付く。土師器・須恵器・瓦器が出土した。

建物3　梁行4間（1.8m）・桁行5間以上（1.8～2.5m）で、N 6°Wを測る。西面北寄りに2間の下屋が付随する。ただし、規模が大きいことから柵列の可能性も考えられる。土師器・須恵器・瓦器が出土した。

建物4　梁行2間（1.4・1.9m）・桁行1間以上で、N 16°Wを測る。土師器・須恵器・瓦器が出土した。

建物5　梁行2間（2.1m）・桁行1間以上で、N 5.5°Wを測る。土師器・須恵器が出土した。

建物6　梁行3間（2.1m）・桁行3間（1.7～2.2m）で、N 85°Eを測る。東西面に下屋が付く。一番南の柱列は4間を測り、身舎と柱筋が通らないため、付属施設と考えられる。土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁が出土した。柱穴は直径50cm、深さは40cm以上を測り、他の建物より格が高いことをうかがわせる。

建物7　梁行2間以上（2.8m）・桁行2間以上（2.1m）で、N 5°Wを測る。土師器・須恵器・瓦器が出土した。

建物8　梁行2間以上（2.1m）・桁行1間以上（2.5m）で、N 85°Eを測る。土師器・須恵器・瓦器・青磁が出土した。

建物9　梁行2間（1.8m）・桁行3間（1.8m）で、北西隅に突出部が付く。N 83°Wを測る。西側を除く3面に下屋が付くが、南東隅はつながっていない。柱穴238より聖宋元寶（初鋳年1101年）、他には土師器・須恵器・瓦器が出土した。西側を除く3面に雨落ち溝（溝35・205・203・169・251）が確認できる。溝35には完形に近い土器76～80が多く、出土数の少ない瓦片（いぶし瓦？）も1点出土した。溝251からは釘と思われる鉄製品が出土した。

建物10　梁行2間（2.2m）・桁行1間以上で、N 11°Eを測る。北側に下屋が付く。

塀1・2　5間を測る。建物6の身舎と柱筋が通らないため塀と判断したが、建物6の軒支柱、もしくは付属建物の可能性もあり、その場合、建物6の一番南の柱列を建替えたと考えられる。土師器・須恵器が出土した。

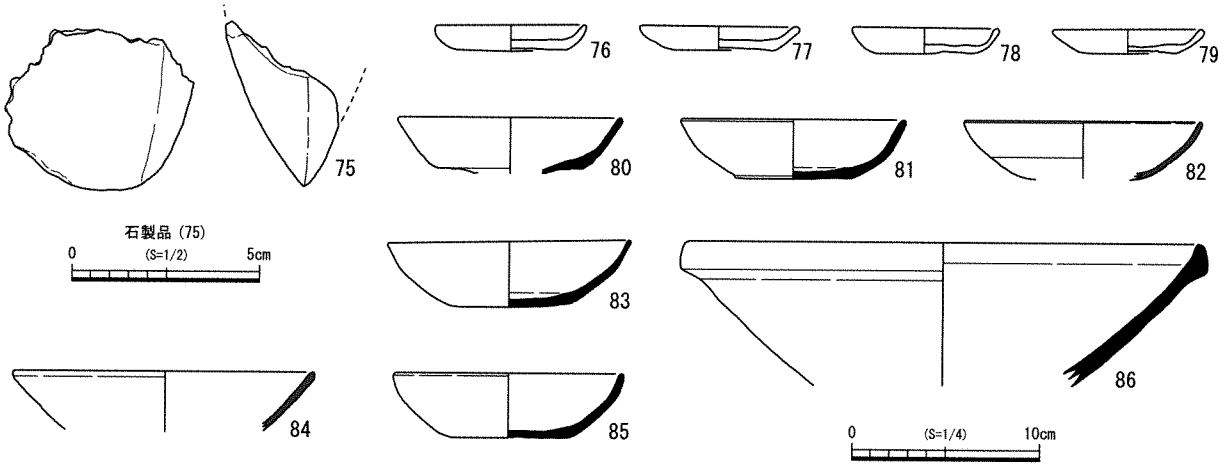
塀3　2間を測る。建物7に付随する。

溝135・231　雨落ち溝と思われたが、内側に建物は確認できなかった。土師器・須恵器・瓦器82・青磁が出土した。

土坑45　5×6mの大型土坑である。時間の都合上完掘せず、一部分のみ掘削した。深さ約35cmを測り、下層には灰黄色系のシルトが堆積する。遺物はわずかに土師質土器の小片が出土したのみである。池状遺構と思われたが、土壌堆積からは流・滞水が確認できず、性格不明である。

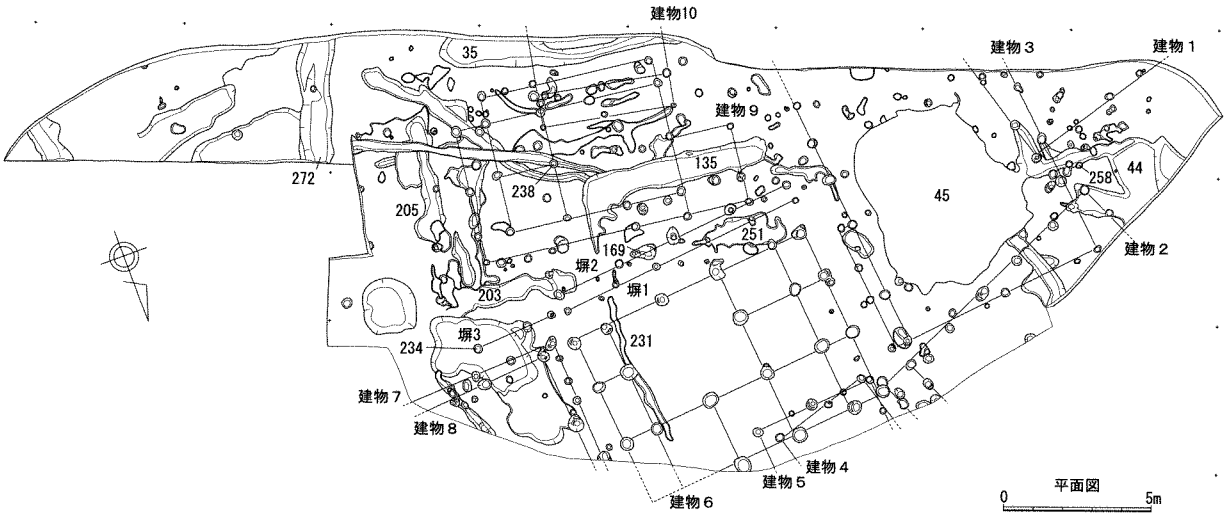
建物の柱穴からは瓦器が出土しており、その範囲が12～13世紀代ということがわかった。しかし、切り合いがほとんどなく、前後関係を見極めるのには苦慮した。まず、本調査区内では焼土と思われる

土塊が出土する遺構が多く、火災が考えられたが、赤変色した場所や炭化物は確認されなかったので、調査地内ではなく近辺での火災と考えられる。そして、建物５のみこの焼土が確認されなかった。ただし、建物５は全体を調査できていないため、たまたま未確認の可能性もあるが、焼土や瓦器が出土していないことから最初の建築と考える。その後から焼土を含むようになる。建物５→建物２（12 世紀後半）→建物１・４（13 世紀前半）→建物９→建物６・８・塀１・２→建物３・７・塀３（13 世紀末）となる。建物 10 は建物９の前後に位置すると思われる。（定松）



75　包含層　76～80　溝 35　81　遺構 44　82　溝 135　83　遺構 234（塀 3）　84　遺構 258　85・86　溝 272

39 区　出土遺物



39 区　平面図

2．まとめ

本調査では縄文時代前期、弥生時代前期～室町時代の遺構が確認できた。今年度で圃場整備事業に伴う平石遺跡の調査は終了となり、これまでの調査結果を総括していく。

縄文時代の遺跡は市内ではまだ発掘事例が少なく、本遺跡からまとまって出土した土器は貴重な資料となる。３・21・26 区では後期、10・32 区では前期の土器を確認した。３区では前期の土器片も少量

ながら出土しているが、10・32区は北白川下層Ⅱ式であるのに対し、3区は北白川下層Ⅲ式と時期差がある。遺構は3区・26区で後期の土坑などを確認した。

弥生時代は遺跡南部と35区北端部で確認した。生活遺構である竪穴住居は1区（後期）・3区（前期）・35区（中期）で建替えを含め4棟と少ないが、土器片は出土していることから、未調査の圃場面に埋蔵されていると考えられる。終末期の土器の中には東阿波型土器や讃岐地域と思われる土器片があり、交流があったことがうかがわれる。

古墳時代は10・28・35区で確認された。10・28区は南端部の大溝（遺構583・1）より土器や滑石製の剣形石製品が、35区溝（遺構153）より滑石製の有孔円板が出土し、祭祀を行う有力者である豪族の存在が推測できる。住居跡などの生活痕は未確認であり、南部の丘陵上に埋蔵されている可能性が考えられる。

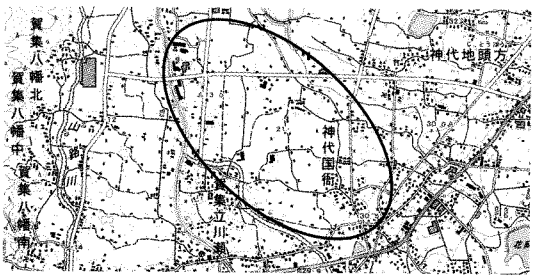
奈良時代の遺構を確認した35区北端部や38区は、当初三原川の後背湿地に位置するため遺構は皆無であろうと推測していたが、微地形復元を行うと西側に北西方向の谷筋を持つ張り出し状の微高地上に位置していることがわかった。

平安時代は遺跡中央から西部にかけて、埋没した谷筋を囲むように確認された。奈良～平安時代の製塩土器が多く出土し、塩の生産もしくは物流に関係していたと思われる。遺跡の西部で多く確認した土石流を思わせる河道には、平安時代までの遺物が含まれることから、この時期に西側を流れる柿木谷川の氾濫など、なんらかの災害が発生したと考えられる。

中世は標高5m以上で、平安時代の河道を避けるように展開する。10・28区で室町時代の遺構・遺物を少数確認したが、ほとんどが鎌倉時代の範疇に入るもので、多くの掘立柱建物から短期間での建替えが行われたことがわかる。湊地域は古代以降、淡路国の国津（港）として栄えてきた海上交通の要衝であったため、室町時代には湊城・叶堂城などの城は出現するが、集落は急速に衰退し、内陸部に移っていったようである。（定松）

3　嫁ヶ渕遺跡－６次調査－・木辺遺跡・長手遺跡・国衙廃寺跡－２次調査－

所 在 地　神代国衙～賀集立川瀬
事 業 名　経営体育成基盤整備事業（国衙地区）
担 当 者　坂口弘貢・山崎裕司
種　　別　確認調査
調査期間　平成 26 年６月 16 日～ 11 月７日
調査面積　452 ㎡（２×２ｍ 113 ヶ所）



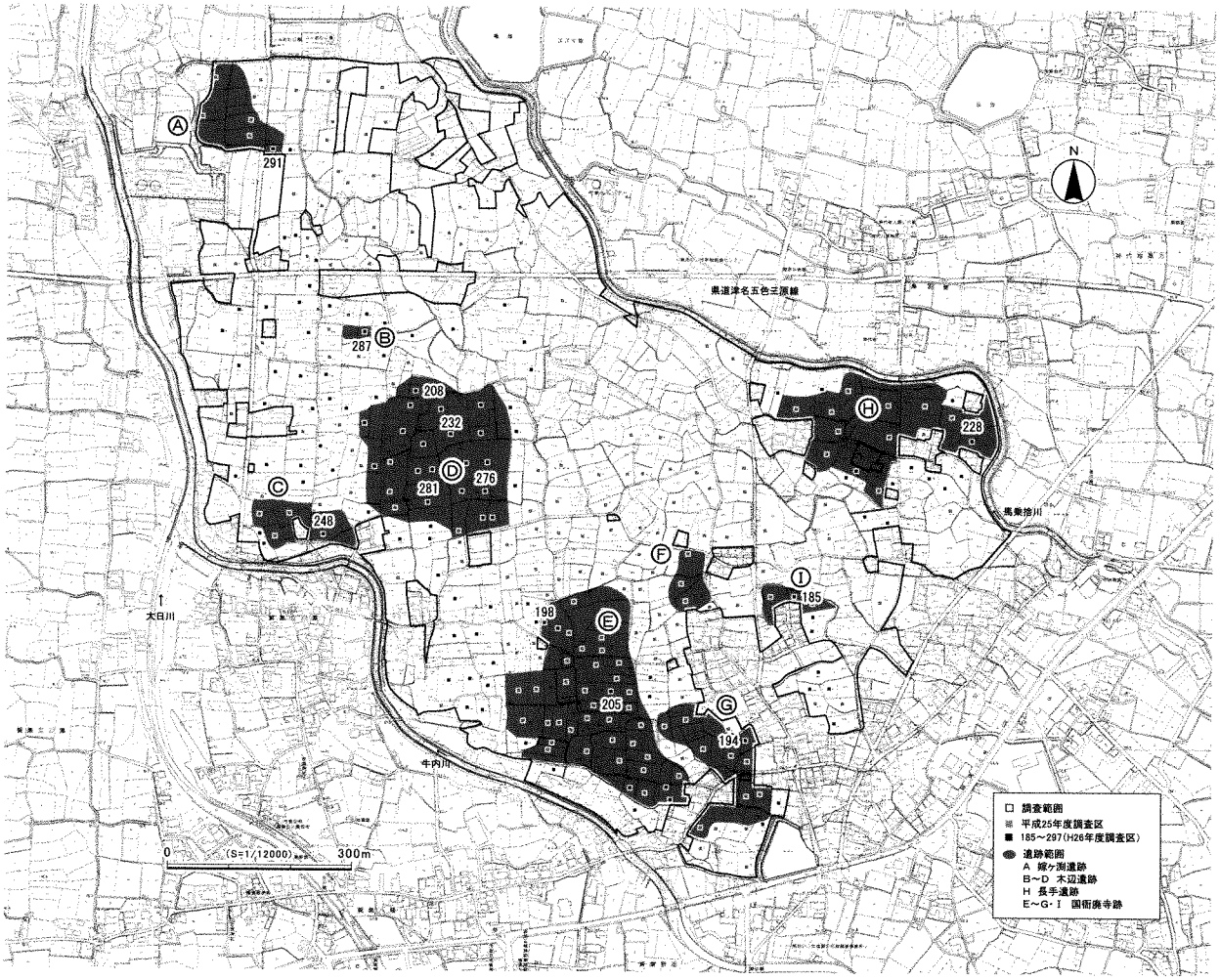
調査の位置

１．調査内容

本調査は上記の県営圃場整備事業に伴い実施した確認調査である。

調査地は、三原平野中央南寄りの南東から北西方向に緩やかに傾斜する水田からなり、北側を馬乗捨川、南を牛内川、西を大日川に挟まれた範囲となる。調査地北西部には古代官衙遺跡である嫁ヶ渕遺跡、南部には国衙廃寺跡などが立地している。

調査は平成 25 年度に農作物の作付け等で実施できなかった部分を中心に２× ２ｍの調査区 113 ヶ所を設定し、重機・人力併用で進めていった。以下主要調査区の概要を記す。なお調査区番号については、



調査区設定図

25年度の引き続きでNo.185～297とした。以下主な調査区の概要を記す。

［A地点］

No.291　調査地北西部に位置する調査区である。遺構は確認できなかったが、比較的安定した明黄褐色粘質土（5層）を確認した。その上の褐灰色極細砂質土（4層）から、古代の遺物が出土している。

［B地点］

No.287　西壁面で礫混明黄褐色粘質細砂（8層）の北方向への落ち込みを確認できた。落ち込みからの遺物はなく、詳細な時期は不明であるが、中世以前と思われる。

［C地点］

No.248　褐灰色粘質土（5層）をベースに小穴を確認した。P1は深さ37㎝を測り、柱穴になる可能性が高い。遺物は焼土に混じって土師器片が出土した。P1・2共に中世と思われる。

［D地点］

No.208　にぶい黄色細砂質土（5層）・にぶい黄色細砂（6層）をベースに溝を確認した。幅約1m、深さ約50㎝を測る。遺物は弥生時代中期と思われる土器片が出土した。

No.232　にぶい黄色細砂質土（7層）をベースに溝・土坑などの遺構を確認した。SK1は深さ22㎝、SD2は幅33㎝、深さ26㎝を測る。遺物は破片で時期決定は困難であるが、SK1とSD2が古代、P3は弥生時代の可能性がある。

No.276　明黄褐色細砂（4層）をベースに小穴を確認した。直径32～38㎝、深さ16㎝を測る。遺物は土師器・製塩土器が出土しており、古代と考えられる。

No.281　褐灰色粘質土（6層）をベースに溝を確認した。幅約40㎝、深さ20㎝を測る。遺物は土師器・製塩土器・須恵器が出土しており、中世と思われる。

［E地点］

No.198　黒褐色土（3層）をベースに小穴を確認した。直径40～45㎝、深さ31㎝を測る。出土遺物はないが、中世の遺構と思われる。

No.205　黒褐色粘質土（6層）～礫混オリーブ黄色砂（8層）を中心に奈良時代頃の須恵器・土師器・製塩土器が出土している。本調査区周辺が谷地形にあたるため、遺物量は比較的多い。

［G地点］

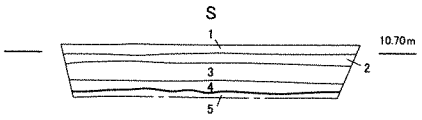
No.194　明黄褐色土（5層）をベースに小穴や溝を確認した。その内P1は直径約35㎝、深さ約30㎝で柱穴になると思われる。遺物は土師器片が出土しており、中世と考えられる。

［H地点］

No.228　にぶい黄橙色砂質土（6層）をベースに多くの遺構が検出された。黒褐色粘砂質土＋灰黄褐色砂質土（3層）上面にも遺構が観察され、複数時期にわたると考えられる。遺構からの良好な遺物は無いが、黒褐色粘砂質土＋灰黄褐色砂質土（3層）より中世後半の土製煮炊具が出土していることから、同時期の遺構が広がっていると推定される。

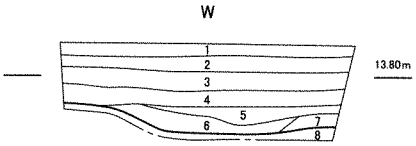
［I地点］

No.185　耕作土下約40㎝で調査区北西部の礫混褐灰色細砂質土（4層）を中心に土師器・製塩土器片がわずかに出土している。時期は古代～中世と思われる。



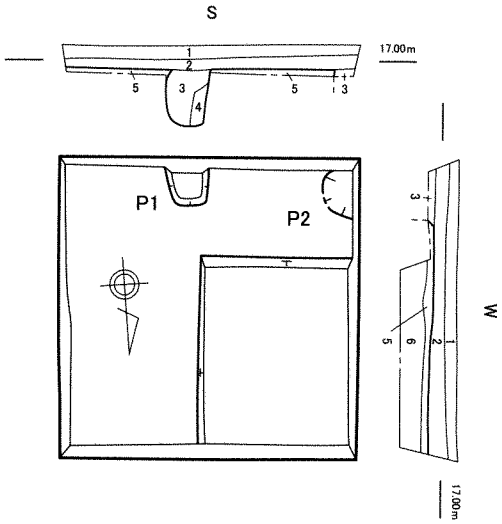
No.291 （A地点）

1. にぶい黄橙色10YR7/2極細砂質土(Fe・Mnわずかに含む)
2. 灰黄褐色10YR6/2極細砂質土(Fe多く含む)
3. 褐灰色10YR4/1粘質土
4. 褐灰色10YR6/1極細砂質土
5. 明黄褐色2.5Y6/6粘質土(Fe多く含む)



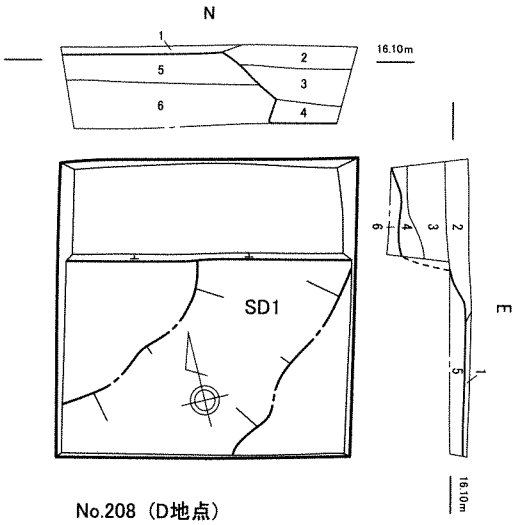
No.287 （B地点）

1. にぶい黄橙色10YR7/3極細砂質土(Feまばらに含む)
2. 灰黄褐色10YR6/2粘極細砂質土(Feわずかに含む)
3. 褐灰色10YR4/1粘質土(Feわずかに含む)
4. 黒褐色10YR3/1粘質シルト
5. 黒色10YR2/1粘質シルト
6. 黒褐色10YR3/1粘質細砂
7. 黄灰色2.5Y6/1砂
8. 礫混明黄褐色2.5Y7/6粘質細砂(φ15cm以下多く含む)



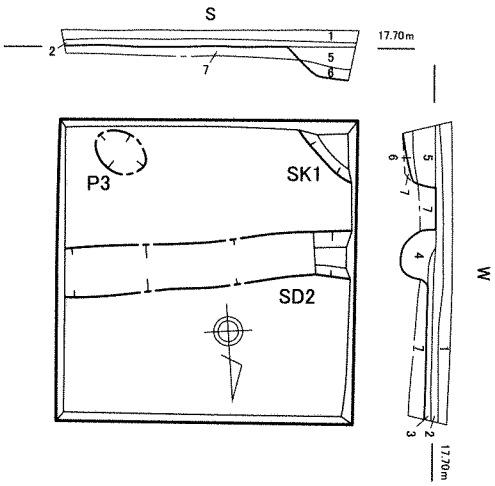
No.248 （C地点）

1. 灰黄色2.5Y6/2細砂質土(Fe多く含む)
2. にぶい黄橙色10YR7/3極細砂質土(Feまばらに含む)
3. 灰黄褐色10YR6/2細砂質土(Mnわずかに含む)
4. 灰黄褐色10YR6/2細砂質土(Mnわずかに含む)＋
   褐灰色10YR4/1粘質土(Mnまばらに含む)
5. 褐灰色10YR4/1粘質土(Mnまばらに含む)
6. 浅黄色2.5Y7/3細砂質土



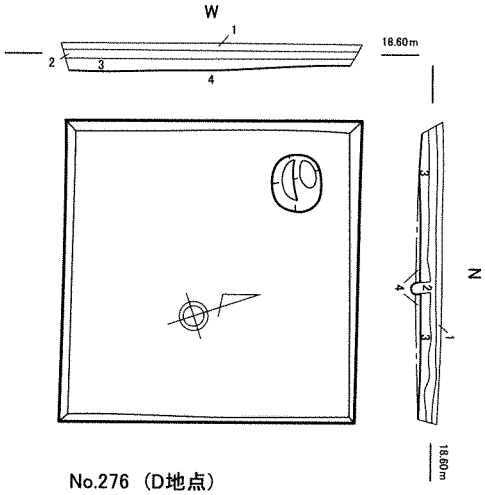
No.208 （D地点）

1. にぶい黄色2.5Y6/3極細砂質土
2. 黒褐色10YR3/1粘質土
3. 黒褐色10YR3/1粘細砂質土
4. 礫混灰黄褐色10YR5/2粘極細砂質土(φ5cm以下礫わずかに含む)
5. にぶい黄色2.5Y6/3細砂質土(Mnわずかに含む)
6. にぶい黄色2.5Y6/3細砂(Feわずかに含む)



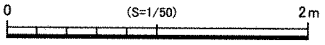
No.232 （D地点）

1. 浅黄色2.5Y7/3極細砂質土(Fe多く含む)
2. 灰黄色2.5Y7/2細砂質土
3. 褐灰色10YR6/1細砂質土(Mnまばらに含む)
4. 褐灰色10YR5/1細砂質土
5. 褐灰色10YR4/1細砂質土(Mnまばらに含む)
6. 灰黄褐色10YR5/2細砂質土
7. にぶい黄色2.5Y6/3細砂質土

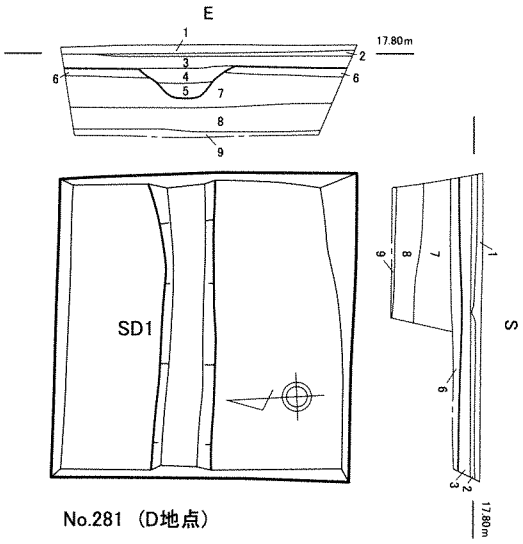


No.276 （D地点）

1. 灰黄色2.5Y6/2細砂質土
2. にぶい黄橙色10YR7/2細砂質土(Feわずかに含む)
3. 褐灰色10YR5/1細砂質土(Mnわずかに含む)
4. 明黄褐色2.5Y7/6細砂(Feわずかに含む)

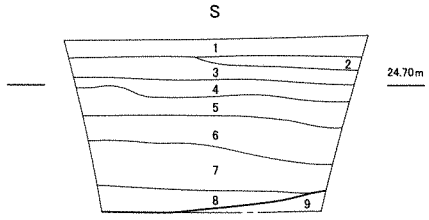


調査区平面・層序図 1



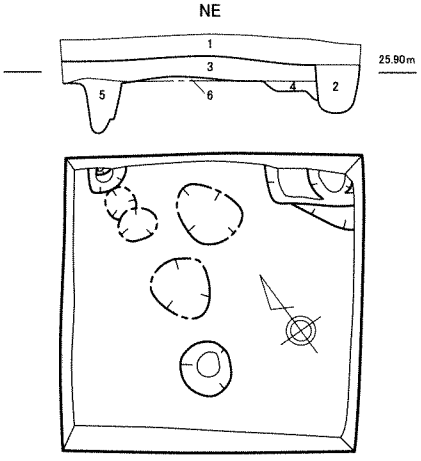
No.281 （D地点）

1. 灰黄色2.5Y6/2極細砂質土
2. にぶい黄橙色10YR7/2極細砂質土
3. 灰黄褐色10YR6/2極細砂質土(Fe多く含む)
4. 灰黄褐色10YR5/2粘極細砂質土
5. にぶい黄褐色10YR5/3粘極細砂質土(Feわずかに含む)
6. 褐灰色10YR5/1粘質土
7. 褐灰色10YR4/1粘質土(Mnわずかに含む)
8. にぶい黄色2.5Y6/3粘質土
9. にぶい黄色2.5Y6/4粘極細砂質土



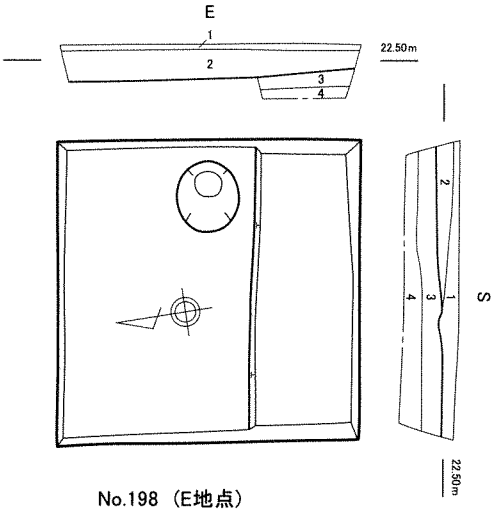
No.205 （E地点）

1. 灰オリーブ色5Y5/2極細砂質土
2. 灰黄色2.5Y6/2極細砂質土(Feわずかに含む)
3. にぶい黄橙色10YR6/3細砂質土
4. 灰白色10YR7/1細砂質土(Mnまばらに含む)
5. 灰黄褐色10YR4/2土
6. 黒褐色10YR3/1粘質土
7. 褐灰色10RY4/1粘質土
8. 礫混オリーブ黄色5Y6/3砂(φ10cm以下礫多く含む)
9. 礫混灰オリーブ色5Y4/2砂(φ20cm以下礫多く含む)



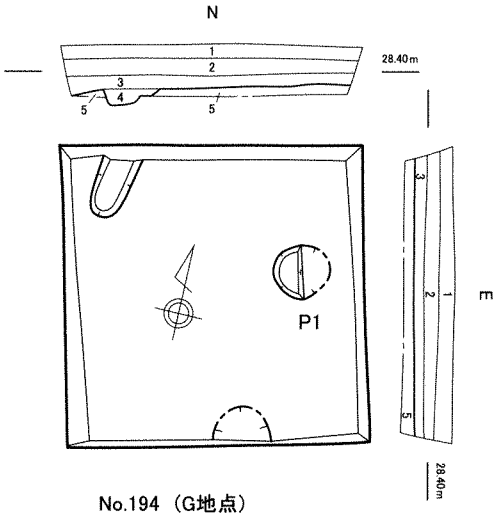
No.228 （H地点）

1. 灰黄褐色10YR5/2砂質土
2. 褐灰色10YR5/1砂質土
3. 黒褐色7.5YR3/1粘砂質土＋灰黄褐色10YR5/2砂質土
4. 褐灰色10YR5/1砂質土＋にぶい黄橙色10YR7/4砂質土(Fe・Mn含む)
5. 褐灰色10YR5/1粘砂質土
6. にぶい黄橙色10YR7/4砂質土(Fe・Mn含む)



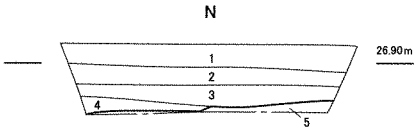
No.198 （E地点）

1. 灰オリーブ色5Y5/2極細砂質土
2. 灰黄褐色10YR6/2細砂質土
3. 黒褐色10YR3/2土
4. 明黄褐色2.5Y6/6土



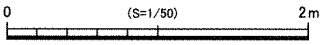
No.194 （G地点）

1. にぶい黄橙色10YR7/2極細砂質土(Feわずかに含む)
2. にぶい黄橙色10YR7/3極細砂質土(Fe多く含む)
3. 褐灰色10YR5/1土
4. 礫混褐灰色10YR4/1土(φ5cm以下礫まばらに含む)
5. 明黄褐色10YR7/6土(Mnわずかに含む)

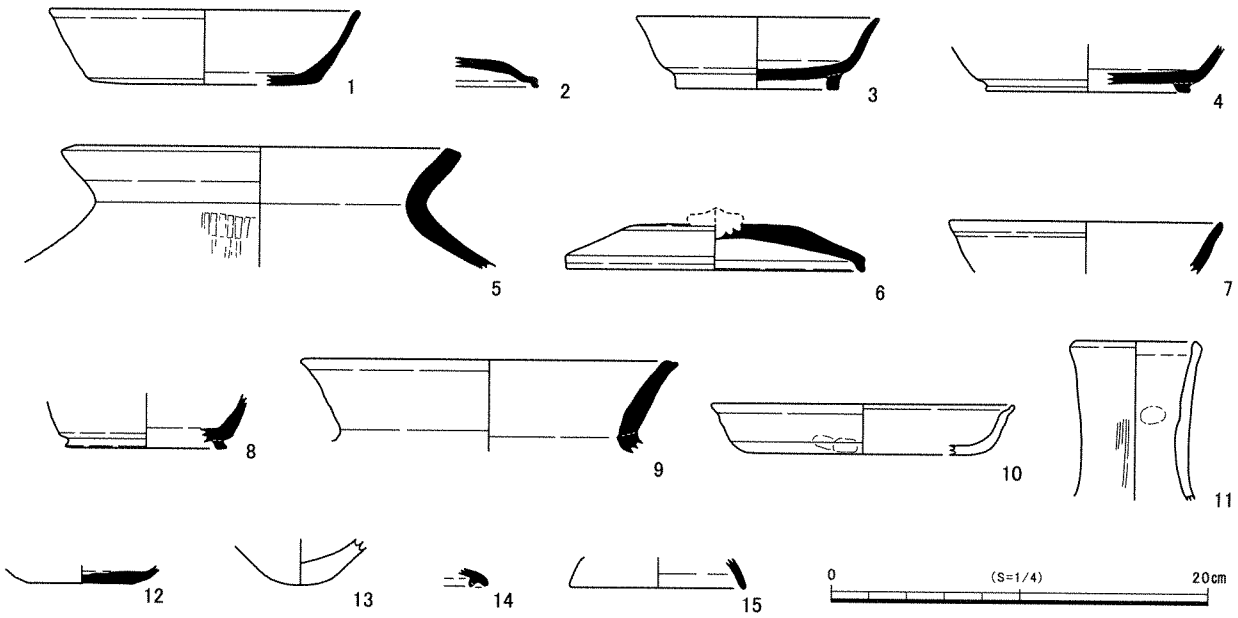


No.185 （Ｉ地点）

1. 礫混にぶい黄橙色10YR6/4極細砂質土(Feまばらに・φ5cm以下礫わずかに含む)
2. 礫混灰黄褐色10YR6/2細砂質土(φ5cm以下礫わずかに含む)
3. 礫混にぶい黄橙色10YR7/2細砂質土(Mnまばらに・φ5cm以下礫含む)
4. 礫混褐灰色10YR6/1細砂質土(Mnまばらに・φ5cm以下礫含む)
5. 礫混黒褐色10YR3/1土(φ30cm以下礫多く含む)



調査区平面・層序図２



1 No.205 5層　2・3・4・5 No.205 7層　6・7・8・9・10 No.205 8層　11 No.208 SD1
12 No.232 SD2　13 No.232 P3　14 No.281 3層　15 No.281 SD1

調査区出土遺物

2．まとめ

平成25・26年度の調査において、大きく9ヶ所（A～I地点）で遺構または遺物包含層などを確認することができた。

A地点は調査地北西部にあり、嫁ヶ渕遺跡の範囲と考えられる。No.291調査区は、黄色系の土層が広がり、奈良・平安時代の遺物が少量出土していることから、遺跡の周縁部にあたると思われる。B・C・D地点は調査地西部～南西部に位置する。B地点は遺構の分布と遺物が非常に少なく、小規模な範囲を想定する。C地点は牛内川の北側にあり、柱穴と思われる遺構が認められることから、中世の集落が広がっていると考えられる。D地点は弥生・奈良時代、中世の集落が想定される。この3地点を合わせて木辺遺跡とする。E地点は調査地南部、従来からの国衙廃寺跡周辺に位置する。時期的には古代～中世初め頃が想定され、No.205調査区などからややまとまって遺物が出土しており注意される。F地点は調査地中央東寄りにあり、25年度の調査から遺構は溝が中心で遺物が少なく、居住域から外れたような状況である。時期は平安時代～中世が想定される。G地点は調査地南部にあり、柱穴と思われる遺構などを確認しており、中世と考えられる。I地点は調査地中央東寄りにあり、明確な遺構は確認できていないが、出土遺物から時期的に古代～中世が想定される。E・F・G・Iの4地点を国衙廃寺跡とする。H地点は調査地北東部の馬乗捨川西～南沿いにあり、25年度の調査において長手遺跡とした部分で、今回の調査においても中世の遺構や遺物が確認できており、集落が広がると考えられる。

（坂口）

2019年3月29日発行

南あわじ市埋蔵文化財調査年報XI
2014年度　埋蔵文化財調査

発行　南あわじ市教育委員会
編集　南あわじ市埋蔵文化財調査事務所
〒656-0455　兵庫県南あわじ市神代国衙1100
TEL 0799-42-3849
印刷　佐藤印刷
〒656-0501　兵庫県南あわじ市福良甲1006番地4
TEL 0799-52-0049